

#1 STONE OF STEEL BLUE

鋼青色の宝石

地球南極点から一〇〇〇キロの地点、「ジャム」と呼称される異星体の地球侵略用「通路」を抜けた先にある未知の惑星、フェアリイ。ジャムの侵攻を受け始めてから、そして、戦闘の場所がここ、フェアリイ星に移つて以来数百年が過ぎた。地球とジャムの戦いは続いている。依然としてジャムの正体は不明、地球に仕掛けている戦闘の目的も不明のままだった。

この時代、戦闘は全て、電気の騎士モーターヘッドによつて左右されていた。たとえ勝利したとしても、そこを不毛の地にしては意味がない。ジャムとの戦闘においては、最小限の被害で勝利を得ることが優先された。そして惑星フェアリイにおけるジャムとの戦闘にも、MHが投入されたことは言うまでもない。ジャムはその正体と同じく、動力も装甲材も何もかもが未知数であることを除けば、人類側と同じMH型の兵器を使用し、現状で戦力はほぼ拮抗している。勢力差は五分五分——悪く言えば、膠着状態に陥っているというのが現状であった。

イレーザーインジンという永久機関を動力源に持ち、再生能力のある装甲を備えた完全なる史上最强の兵器。科学技術の生み出した最高の芸術品。平均全高一六メートル、自重二二〇トン、出力一兆馬力のこの兵器は、常人にはコントロールできない。MHを駆れる能力を持つ「ヘッドライナー」は、「騎士」とも呼ばれ、現代の戦闘において最も重要視される人間である。騎士は時速一八〇キロで地を駆け、三〇メートルの壁を飛び越えることのできる生体反応速度、戦闘能力と肉体的强度を生まれながらに備えている。二〇万人に一人という極めて低い出生率の元に出現する彼らは、『戦争の代理人』という役目——力を持たない一般人の代わりに前線に立つという宿命を背負わされている。

しかし、騎士のみが扱える最强の兵器にも唯一の弱点があつた。超绝的な騎士の力をMHにトレースさせるためのインターフェイスが必要だったのである。そして生み出されたのは、人の形をした有機コンピュータだった。

ファティマ——それが、ヒトが造りし人工の生命の名前である。騎士と同等の反応速度を持ち、史上最高の演算情報処理能力に加え、地球上最も美しい容貌を持つ亜人種。騎士のパートナーとし

て、MHを演算制御するためだけに生まれた「生きるロボット」。

それが彼らだった。

戦いに不可欠であるがゆえに、しかしいつか本来の目的を違えたところで、ファティマは科学技術の躍進と優れた設計者たちの試行錯誤により精緻を極めていく。彼、彼女らはヒトに近くなり過ぎてしまったのだ。人工卵子の一つから生み出された、限りなくヒトに似せて創られた「人形」たち。彼らはヒトとは違うモノでありますから、人間と変わらぬ心を宿す。しかし法は彼らと人間を冷酷なままでに差別化した。そして、主である騎士なくしてはいかなる権利を主張することも許されぬ存在として、ファティマは長く辛い生を生きることを余儀なくされる。

最初のファティマが誕生した時、誰にこのような未来が予測できただろうか。それでもなお、数々の製作者——ファティマ・マイド

たちは、儘くも強く、哀しくも美しい「作品」を誕生させてゆく。

そしてこれは、数奇な星の下に生まれた一人のファティマとMH、そして、その魔性に自ら囚われることを選んだ、一人の騎士についての物語である――

時を遡ること少し。

轟々と風が哭いている。大地を覆う砂を巻き上げた風が唸る。

そこに風以外の音が混じり始めた。重い金属が擦れぶつかり合う音、エンジンの咆哮、そして剣戟が響いた。

そこには二機の電気騎士の姿があった。MHと呼ばれる至上最高の兵器。一機は青灰色の機体、そして対峙するもう一機は黒。空間を切り抜いたように黒い。そこだけ次元を異にしているかのような、三次元に存在する立体とは思えないような、影のような機体だった。

「マスター、五〇〇メートル前方にテレポート反応。敵の援護かと思われる」

二機が相対する場所からそう離れていない場所で、空間に歪みが生じた。瞬間、黒い機影が二つ出現する。塗り潰したような闇色のMHが、組み合う二機との距離を物凄い速さで縮めてくる。

青いMHが圧倒的に不利だった。他の僚機はすでに目の前のたつた一機によつて全滅させられていた。騎士もファティマも、一人たりとも脱出した者はなかつた。皆自機と運命を共にしたのだ。

『……化け物め！』

騎士が吐き捨てるようになつた。

ただ一機生き残つたのは隊長機だつた。倒された部下たちの仇を討つてやりたい。だが、あれだけの長時間、激しい機動をしておきながら、目の前の黒いMHは関節に溜まつているであらうダメージの影響を少しも受けていないようである。

三対一という形勢不利を認め離脱を試みようとした。だが、ランド・ブースターのエネルギー・ブルルの再充填が規定レベルに達していないため断念せざるを得ない。相手の戦闘パターンをエミュレートしている時間はなかつた。離脱が不可能ならもはや撃破されるまで戦うしかない。不気味な影のような三体のMHを相手に、疲弊の激しいこの機体で果たしてどこまでやれるか――

目の前のMHの正体を知るべく、零は自機の損傷具合をチェックしながら、同時にデータライブラリを検索した。しかし該当するデータはどれだけ探しても見つからなかつた。各部関節のパーツの

継ぎ目が見えない。識別マークも付けていない。どの国の機体デー
タにも該当するフレームが存在しない。知られていない新型機か。
ファティマ・シエルの中、零は思った。それにしては異様すぎる。あ
れは通常のMHの動きを超えていた。まるで機械ではない、巨大な
生物のようだ。

すると次の瞬間、ある記憶が蘇った。零は戦慄する。ずっと昔に
どこかで見た、古い資料にあったその不吉な姿は、今対峙している
モノと酷似していた。

「マスター……この機体はもしかすると、ジヤ——」
そう言いかけた言葉は、通信回線の向こうからの警告にかき消さ
れてしまう。

『零！ 残像攻撃が来るぞ！』

（否、違う、あれは）

想像を絶する速度で接近してくるあの機影は――

『残像じゃない！ 実体だ、マスター！』

遅れて現れた二機が、膠着状態に陥つた二機を囲んだ。全天型モ
ニターの視界が、こちらに向かって加速してくる黒い色彩で埋めら
れていく。振り上げた剣が確実に自機の頭部を狙つてくるのを、零
の目はスローモーションで再生される映像のよう捉えていた。腰
部のサスペンションを咄嗟に沈み込ませるも、それも予測の範囲内
とばかりにもう一機の切先が零のいるコケピットに迫る。

（間に合わない――回避は無理か……！）

弾き出した全ての回避パターンの成功確率の数値は絶望的で、零
は、最期を予感した。しかし。

『零！ コントロールを！』

騎士の声に、固く閉じた瞼を開くが早いか、零は反射的にコント
ロールを渡していた。

『避けるぞ！』

片足の踵を支点とし、上体を支えきれなくなるぎりぎりの角度ま
で、一瞬で機体が傾いた。零たちの乗る機体を貫くはずだった一撃
は空を切つた。

零からコントロールを受け取った騎士は、躊躇しきまに相手の剣を
握る腕を狙つたが、信じられないことに、黒い機体は振るわれた刃

を避けるのではなく、胸部を自ら差し出すかのような体勢を取つた。
実剣の刃先が吸い込まれるように、MHの胸部を刺し貫いた。
『やったか！』
だがその直後、一瞬のうちにモニタの熱源反応が爆発的に大きくなつた。

（しまった！）

ここにも動力源が……！

畏だつたのだ。何故これらの所属不明機がここまで執拗に自分
たちの乗機を破壊しようとするのか、零にはおよそ理解できなかつ
た。自爆してまで相手を倒そうとする、こんな戦いは、通常のMH
戦ではあり得ない。

『まずい、敵機爆発する！ 離脱！ ブースターを――』

ジェネレータの予備を使いつつしまつていてことを思い出し、
零は愕然とした。この距離でMHの自体破壊に巻き込まれればこち
らも無事では済まない。

（くそっ、ここまでか……！）
その時、零、と呼ぶ声がした。

『行け！ おまえはここで命を落としてはならない！ 次の主を探
せ！』

『マスター？ 何を、言つて……？』

騎士の言葉に、零の頭部に埋め込まれているクリスタル――ヘッ
ド・コンデンサが反応した。抗えない。もはや目の前の騎士は主で
はなくなりつつあった。ファティマの頭部にあるクリスタルに騎士
が手で触れることによつて、ファティマはその情報を読み取り、騎
士が認めることでファティマは「主」を得る。主となつた騎士の死
亡か、「次の主を探せ」という言葉によつて、二者の契約は解かれ
るのである。

『ここまで、共に戦つてくれたことを感謝する……』

生き延びてくれ、零。
それが、騎士が最後の瞬間に願つたことだつた。

静寂に包まれた大地だった。砂と礫ばかりの大地に緑萌える春の訪

ではない。
(おまえたちはいつまでここにいる……?)

動かなくなつたMHの残骸の傍らに立ち、零は呟いた。

「騎士に仕えて戦うことが、おまえやおれたちの生きている証——

「でも、それがすべてなのか?
それができないこの身は、生きているとは言えないのか……?」

獣の咆哮のような音と共に、一陣の風が、動かなくなつた電機騎士たちの間を通り過ぎていった。

かつては同じ隊で共に戦つてきたMHたちの残骸の陰で爆風を避けながら、それでも砂塵と埃にまみれるのも構わず、一人残された零は立ち尽くしていた。

『次なるおまえの主を探せ』

その言葉を聞いたのは三度目だった。最初の騎士も、その次も、そして彼も……同じことを告げて、逝つてしまつた。

皆、自分を置いていく。

あるべき道を外れたこの身が安寧の場所を求めること自体間違つているのかもしれない、零は思つた。ヒトに仕えている限り、避けでは通れない運命であることは解つていたはずなのに。

それなら、いっそ、もう誰も選ばなければいい。

(もうおれは、騎士に仕えるなんて、したくない——)

「普通の」ファティマであれば知らずに済んだ諦観や絶望、孤独が零を苛んだ。

遠い昔に知つていた景色を不意に思い出した。地球にはない色と光沢で覆われた野の眺め。とてもない緑と驟雨。春ともなれば、などらかな丘陵を濡らす霧が、滲み出すような緑の上に零を生じた。眼前に意識を戻せば、広がるのは、歴史も人も死に絶えたようだ。

ディスプレイに示された目的地、戦闘記録に残つた撃墜地点に辿

数百年以上に渡つて紛争を続ける二つの国家の国境地帯には荒涼とした砂漠が広がつてゐる。この場所は、互いに対する牽制、挑発のための軍事演習が行われたりすると同時に、治安の悪さにかこつけてMHの性能試験、手合いにも使われていた。

砂嵐の渦巻く地に、ブッカーは頬に一筋切傷痕のついた顔を顰めて降り立つた。

フェアリイを発つたブッカーは、フェアリイと地球とを繋ぐ、地球側の唯一のポイントである南極を経て、地球最大の大陸の中央に近い砂漠地帯へと向かつた。彼は、遮るもののない大地の上、きつい陽射しを避けるためのフードを被り直し、その下に砂塵避けのゴーグルを被ると、ヘッドライナーの身分証明ともいえる光剣と、刃渡り一メートル弱の実剣一本のみを携え、大型のデイグで砂の海へと踏み込んだ。見渡す限り、粒子の細かい砂がさらさらと風に向かう。

おられる以外、砂漠の上には動くものは何一つない。割り出した座標をナビゲータに入力し、操縦をオートモードに切り替え目標へと

り付くと、目の前には、数日前に擱座したと思われるMHの巨大な骸が何体分も残されていた。

青灰色と銀色で彩られていたであろうボディのカラーリングは崩れた装甲の端々を見てとれた。しかし所属を示すマークの類は、機体がほぼ全壊してしまっている今となつては識別不可能だった。フェアリイに入つた情報が正確なものならば、このMHが撃破されたのは数日前という計算になる。しかしくら残骸としか言いようのない姿になつているとはい、一国が所有する騎士団のこれほどの数のMHが、何日もの間回収もされずに放置されているということが、ブッカーには信じ難かつた。だがこれが、この地域の世情の混乱を如実に表わしているのだろう。

ブッカーは、地球の北半球、欧州と呼ばれる地域の果てに浮かぶ小国の出身だった。彼がフェアリイに来る以前、地球で見た地図上でも、この地帯の国境線は、やはり当時から忙しく書き換えられていた。だがどちらが覇権を握ろうと、今のブッカーには関心がなかつた。膨大な時間と人員と物資を費やしてなされているのはゲームのような戦争だ。その駒を進める力を手にした者たちは、かつて地球に現れたジャムの脅威などもはや覚えていないに違いない。かつてはそれを腹立たしく思えた時期もあつた。しかし今はもう、どうでもよかつた。FAFが、多くの機密に関わってきたブッカーをそう容易く解放するとは思えなかつたし、現実もその通りだつた。あの事件——あれからもう何年が過ぎたのだろう。「彼女」を喪つた後、ブッカーにとつては何もかもがどうでもよいことのように思えていた。ここ数十年の自堕落な姿を見てしながら、FAFのお偉方はよくも変わらずこのおれを任務に出せるものだと呴いたくなれる。時折理性の咎める声が聞こえた。酒に溺れMHにも乗らず、おまえは何をしているのか、という声だ。MHを駆る者こそが騎士と呼ばれる。FAFも醉狂なことだ。今の自分はもう飼い殺しにしておく価値もないだろうに。

おれは、もはや騎士たる資格など無くしたのだ——砂塵混じりの熱風に吹かれながら、彼はそんなことを思った。

フェアリイ空軍はその創設時より地球から絶えず監視を受けてきたが、その反面、地球における国家間の紛争、その他的情勢に関与することはなかつた。ゆえにフェアリイ軍人が地球に向うことには極めて稀であり、それにもかかわらずこうしてブッカーが地球を訪れているというのは、FAFが入手したある戦闘記録映像に端を発していた。

「さて少佐、あなたはこれをどう思う」

執務室の壁の一面が巨大なディスプレイに切り替わる。一面の砂に覆われた大地が映し出された。カメラの性能ゆえか、それともこの地方に特有の砂塵のせいか、映像は極めて不鮮明だ。

正体不明の異星体「ジャム」の侵攻に対し、大国と国連が中心となつて組織した超国家的独立軍、フェアリイ空軍・戦術空軍団・フェアリイ基地戦術戦闘航空団所属第五飛行隊、通称「特殊戦」副司令、リディア・クーリイ准将の執務室に呼び出されたジエイムズ・ブッカー少佐は目を凝らしその映像を見た。

「解説部が補正を試みたようですが、これが限界だそです」

クーリイ准将の傍らに控えた彼女付きの秘書が補足した。准将が問う。

「二日前に撮影されたものだ。この黒いMHに見覚えはないか、少佐」立体感のない、強い日差しの下に生じる影のよう機影は、ノイズで乱れた画面上でも判別できる。この不吉な闇色、常識を超える駆動限界には見覚えがあつた。見覚えどころではない、この存在こそが、FAFの存在意義であるのだから。

「憂慮すべきは、これが地球から送られてきたものだということだ」

国連のお偉方が慌てふためいてこれを寄越してきたのよ、と、こちらは全くの冷静さを保つまま、准将は続けた。

地球が初めてジャムという異星体と接触して以来、地球防衛機構の主力であるフェアリイ空軍が盾となり、ジャムの地球への侵入は食い止められてきた。少なくとも、そのように信じられてきた。そしてその結果、地球はジャムの脅威を忘れかけていた。だがこの映像が紛うことなき本物で、映つてているのがジャムだとすれば、FAFはその鉄壁の防衛網を突破されたということになる。

「生存者は」

「搭乗していたヘッドライナーは搭乗機の爆発により死亡。遺体は確認作業の最中だそうですが、MH数機分の大爆発で大破した機体からの回収作業は難航しています。ファティマは——行方不明との報告が」

映像は短いものだつたため、繰り返し再生されている。画質の荒さに徐々に目が慣れてくると、MHが爆発する一瞬前、その頭部、ファティマ用のコクピットが射出されているのが判つた。その後は、爆発が大量の砂塵を巻き上げたために機体の輪郭すら把握できなくなる。

准将は向き直り、傍らの秘書に目配せをした。長身の青年秘書は手元のコンソールを操作し、壁のディスプレイの画像を切り替えた。映し出されたのは極秘機密扱いであるはずの、ファティマの設計データだった。要点が選択され読み上げられる。「生存していると思われるファティマのデータです。形式名R=A=Ni、個体名「零」。

惑星ファエアリイ Dr.リン・ジャクソン直接指揮下のファクトリーリ製、タイプm L型、シリアルナンバー LJ Ni 21。

パワーゲージ 3A—3A—2A—3A—A、クリアランスVV S 1。外見デフォルトレングス一八二センチ、ウェイト五二キロ、アイカラーダークブラウン、アイコンタクトミッドナイトブルー 九〇%スルー』

いかなる国家や組織も、彼ら自身が望むのでない限り、「マイト」と呼ばれる希少なる人種を従わせることはできない。どんな取引があつたかは知らないが、最高機密であろう、この設計データを出させただけでも大したものだ。

「成人」後、すなわち完成形の写真はなかつた。ブッカーは、データが示すファティマの姿を想像した。容姿は日本人に似て、長身瘦躯の男性型。M Lという記号が示すのは青年の「M」と成人の「L」の中間型だということだ。パワーゲージの数値は尋常ではないが、製作者の名を見れば得心が行つた。この生存者……ファティマを保護し、この不明機についての情報を収集せよ。死亡

した騎士の所属する国家にはすでに相応の金額を支払つた。どんな手段を使うことも許可する。ファティマは、最悪の場合遺体で戻つても構わない——脳さえ無事ならば」

デイグから降り、周辺の様子も調べた。基地の司令室で見た映像では、このMHを襲つた黒い不明機は自爆、自壊していたよう目に見えた。ここには、見たところ青色の機体の残骸しかない。うち一機は他のものとは塗装が異なつており、かるうじて隊長機だと確認できた。

ブッカーは確信した。これは、ジャムにやられた跡だと。

ジャムの機体はファエアリイにおける戦闘でも数多く撃破されてきたが、奇妙なことにその残骸が発見されたことは一度もなかつた。MHのエンジン、イレーザーは外燃機関の超高压、光化、高温を外に漏らさないようシールドされており、たとえ機体の大部分が灰になつたとしても、脚部にあるエンジンは無傷で残るはずだつた。それなのに、ジャムのMHはそのエンジンすら残すことなく自壊してしまうのである。

灰になつた装甲が早くも再生を始めていた。しかし内部の機器は再生能力を持たないため、再生しつつある装甲の重みに耐えられず装甲もろとも崩れ落ち風化していった。それを繰り返し、両脚のイレーザーエンジン以外は、見る間にMHだつたということも判別するものが困難な姿になつていく。ここにあるのは、巨大な金属の瓦礫の山でしかない。

ファティマが脱出する瞬間をあの映像は捉えていた。ここは最寄の街からもずいぶん離れている。ファティマがあのまま無傷で脱出できていたとしても、今頃どうなつているとか、とブッカーは冷淡に思つた。救出されたという情報は未だ入つていない。周辺の風評から考へるに、ここは、主を失つたはぐれファティマが半日でも無事でいるような土地ではない。急がなくてはならないだろう。ブッカーにしてみれば、主を失つたファティマがどんな姿になつていいようどもかく保護し、その目で見たものが何であつたのかを知る必要がある。

「ひとまず、街へ戻るか……」

ファティマは主の命令があればこそ戦つて人も殺すが、主を持たないファティマには一切の戦闘行為が認められない。己が身にどのような危害を加えられようとも、人間に抵抗してはならないというマインドコントロールが施されているからである。よつて、自分の身の安全を守る最低限の権利すら持たないロスト・ファティマは、捕らえられた挙句強姦されるか、娼館に売られるか、最悪の場合、殺されるという運命を辿ることも珍しくない。はぐれファティマは人目を惹くため噂にもなりやすい。だとすれば、ここから一番近い市街地であたりをつけていくよりないだろう。このような辺境にあつても大きな街は、仕事を求める騎士が集まり、騎士団のスカウトが目を光らせ、主を求めるはぐれファティマが集まる場所である。しかしその裏では、見境なく手合いを吹つ掛けで名を上げようとする騎士がいるなど、治安は決して良いとはいえない。厄介な任務を任せられたものだ。しかし任務の内容を選べる立場でないことも解っている。ブッカーはデイグに跨り、来た道を戻り始めた。

生睡を飲む音が響く。主を失ったファティマである彼女は、ファティマースーツしか身に付けることができない。しかしそれはあちこちが破れ擦り切れ、ほとんど服としての役割を果たしていなかつた。余程長い間放浪していたのだろう。半裸の全身は煤や埃に塗れていたが、そのファティマの生来の美貌は微塵も損なわれておらず、囲んだ男たちの視線を釘付けにした。

「どこから逃げて来たか知らねえが、安心しな。オレたちの中には騎士もいる。マスターになつてもらえや」

そう言って、リーダー格と思しき、どこか端鄭を思わせる痩せた長身の男が、傍らに頸をしゃくつた。それが合図だつたように、進み出た別の男が、煤と砂に塗れた華奢な肢体を背後から羽交い絞めにする。拘束されたファティマの少女は柳眉を顰めながらも抵抗しない。合図を送つた男は、彼女の頸を掴み正面を向かせる。そして厭らしく細めた目で、震えの止まらないファティマの躰を舐め回すように見た。無抵抗のファティマに投げつけられる嘲りの声。それに呼応し、周囲が下卑た笑みに沸く。

瘦せぎすの男は、少女の自由を完全に奪つたのを確認し、埃で汚れた白い顔を至近から覗き込んだ。

「おい、人形。これが何だか判るか？」

愉悦として堪らないという風情で、男は少女の前に抜き身の刀をちらつかせた。

「まずはこいつらのお相手を願おうか。ちょっとでも抵抗してみな。こいつは良く切れる刃でなあ」

嗜虐的な性的嗜好を持つらしい男にとって、人間には絶対に抵抗できないロスト・ファティマは格好の餌食だった。少女の見開かれた双眸は一瞬恐怖の色を浮かべる。しかし、蒼白になった顔からはすぐさま一切の感情の色は消え、何もかも諦めたように瞳が閉じられた。

男はつまらなさそうに舌打ちをする。

「やつぱり人形か。面白くねえ。おまえら、好きにしていいぞ」

主の庇護を失つたロスト・ファティマに対しては、人間がどんな振る舞いに及ぼすとも罪には問われることはなかつた。男たちは待ち構えていたように凶暴さを剥き出しにする。華奢なその肢体を乱

「こいつは——すげえ」

「おい、いたぞっ！」

「逃がすなよ！」

「どうせ人間様にや逆らえねえんだから、手間かけさせんじゃねえ！」

十人弱の徒党を組んだ男たちが、街外れの寂れた広場で、擦り切れたマントに身を包んだ相手を取り囲んだ。辺りに人影はない。

「はぐれファティマだぜ！ いいもん見つけたなあ」

男たちは下卑た笑い声を上げながらマントを剥ぎ取る。するとその下に隠されていたのは、まさしく人間では持ち得ない造り物のようなファティマの美貌だった。少女型のそのファティマは、目に一杯の涙を浮かべ震えていた。

「こいつは——すげえ」



暴に引きずり倒し押さえつけると、かろうじて残っている服を思い思いで引き剥がそうとした、その時。

光が爆発した。

突然目も眩むような明るい光が頭上から照らされる。羽交い絞めにされていたファティマは咄嗟に瞼を閉じ眼を庇つたが、他は皆膝を折り、光が重く圧し掛かっているかのよう背中を曲げる。眼底を抉られる疼痛に苦しげな声を上げる者もいる。

闇が迫り始めている夕刻。ロスト・ファティマの少女を蹂躪しようとしていた輩の、強い光に灼かれた網膜がどうにか元通りの視力を取り戻した時、人気のない広場は雲に覆われがちな夕陽に時折照らされるのみで、すでに薄暗い地上には、どこにも人の姿はない。「な、何だ、今のは……！」

「探し！一人になるなよ！二人組を作って動け！」

閃光の元を探るべく、少女を押さえつけていた男を一人残し、後の数人は散開し広場を囲む崩れた建物の陰などを調べた。めいめいの手には鞘から抜き放たれた剣や太刀が握られている。

その中の、路地に入り込み奥を調べていた男が不用意にも一人になつた。

黒い影が、路地を見下ろす建物の上に立つていたことにも気付かずに。

そして影は、音もなく足元を蹴つた。男の頭上遙かの高みから、彼を目掛け一直線に落下したのだ。真下にいた男は接触の直前にその気配を察し頸骨が折れるほどの勢いで仰け反つたが、堪らず転ごと大地に激突した。

空中から繰り出された蹴りの爪先が、男のこめかみを斜め上から強打したのだ。おそらく頭蓋骨にひびが入るほどの強力な蹴りだつたかもしれない。倒れた男は何が起きたのか知る間もなかつただろう。白目を剥き出しにして微動だにしない。鼻や口から溢れた血で、顎や胸は血塗れになつていた。

その頃、街ではぐれファティマの噂を聞いたブッカーは、めつた

に人の訪れることのない街外れの方へと全速力で向かっていた。その途中、一瞬辺りを照らすほどに輝いた閃光を目にし、嫌な予感を覚える。閃光弾など持っているのはMHに乗る人間か——ファティマだけだ。そしてそこに辿り付いた時には、不運な一人目がまさに倒されようとしていたのだった。

異様な物音を聞きつけて、殺氣立つた男たちが路地へと駆け込んだ。血塗れで倒れている仲間の一人と、その傍らに立つて、頭からすっぽりとフードとマントを纏った闘入者を認めた。頭に血の昇つた一人が叫び声と共に斬り掛かっていく。マントの人物は刃が届く寸前に大きくジャンプし、集まつて来た全員の頭を飛び越えた。人間技ではない跳躍を目の当たりにし、物陰で気配を殺し成り行きを見ていたブッカーは、柄に伸ばしかけた手を退いた。自分の出る幕ではないと判断したからだ。それよりも捕らえられているファティマに注意を向ける——違う、あれは探しているファティマではない。資料にあつたファティマは男性型だ。

「な、なんだよてめえは！ 騎士か？！」

しかし叫んだ男はそれ以上動けなかつた。興奮し息巻いた男の周りの壁と地面が、その時突如崩壊したのだ。

ブッカーは愉快そうに成り行きを見守つていた。

(ショック・ブレード)

あの坊や、相当な腕だ

しかし何が起こつたのか、男たちには知る由もない。騎士の動きは通常の人間の目には捕捉できない。ましてや軽く腕を振つただけでこのような破壊力が生まれるなど、想像もできないだろう。先刻見せた、無駄のない完璧な足の瞬発力、衝撃波を放つた際の、相手の動きを読み無力化させる手の動き。間違いなくヘッドライナーの反応速度だ、とブッカーは思う。

マントの人物は、力なく倒れているファティマへと歩み寄つた。そして、少女の手首に後ろ手に掛けられた手錠を掴むと、素手で鎖を引き千切る。少女は震える声で言つた。

「……いけません、騎士でない方たちを傷つけたりしたら、あなたが——」

だが少女の言葉を遮るように、顔を覆い隠していたフードがはら

り、と外された。居合わせた全員が、布の下から現れるのはどんな筋骨逞しい男だろうかと身構える。

ところが、現れたのは何もかもがその対極にあるような、長身の若い男の姿だった。

切れ上がった趾は涼しげで、凹凸の少ない頬骨と、肉の薄い鼻と唇が完璧な調和を作り出している。その顔立ちは端整というより、むしろ、美しいといった方がいい。癖の無い真っ直ぐな黒髪に、瞳も同じ黒曜石の色。陶磁器を思わせる肌。マントで隠され見えないが、その下の肢体はさぞぞらりと長くしなやかなことだろうと、見ている誰もが想像したに違ひなかつた。

「少しさはやるようだな。そのファティマが欲しいか？え？」

小山のような巨体を持つ男がうつそりと進み出た。白皙の青年は眉一つ動かさない。

「おまえ、ヘッドライナーだな。ちょうど良い。退屈してたところだ」

言い終えるが早いが、男の形相が淒まじいものに変貌した。獣のような咆哮を上げて、男の右拳が大気を裂いて突進してくる。青年は顔をほんの少し横に逸らし、拳をすいと避けた。白い頬の間近を、岩でも砕きそうな破壊力を乗せた重い拳が掠めていく。すかさず青年は、そのまま数歩分背後に飛び退いた。マントすら纏つたまままだ

というのに、厚い布地に軸の動きを少しも妨げられていない。

「楽に死ねると思うなよ——小僧」

渾身の一撃を避けられ、男は呟くとすでに体勢を立て直していた。

男の右拳が青年の頸に再び急接近した。まともに喰らえば一撃で殴り殺されかねない、上体の重さをかけた攻撃である。腕でブロッ

クする余裕はないだろう。

青年の背筋が、普通ならバランスを失うほど背後に反らされた。

頗れすれに、拳の形をした破壊の黒い影が通り過ぎていく。彼はそのまましなやかな動きでとんぼ返りをうち、そして立ち上がり、瞬間に左脚が相手の顔面めがけて伸びていった。後転する体勢から、

そのまま横蹴りを放つのだ。猛体の男はこの鋭い蹴りを避けた。しかしその反応は、青年の予測範囲内だったようだ。猛烈な速度で男のこめかみまで足先が伸び

ていた。だが次の瞬間にそれは、膝を曲げるようにしていつたん退き、さらにまた猛烈な勢いで繰り出されていく。最初の攻撃を巧みに左へと避けた男だったが、この連続攻撃をかわすほどの余裕はなかったらしい。男は咄嗟に、両肘を縋り、両手を胸に抱き、頭を下げる。細身の躰から繰り出されたとは思えない強烈な打撃だった。思わず数歩後退した男に、さらに第三の蹴りが襲い掛かる。横蹴りを放つた左足を大地に着けると同時に、それを軸脚にして、青年の前進が大きく回転する。足先が空中で半弧を描きながら確実に急所を狙う。恐るべきスピードとパワードだった。

次の瞬間、巨漢の体は背中からどうと地面に倒れた。青年の、全身の体重に加速を加えた回し蹴りが命中したのだ。青年の足先が男の首筋を抉るほどに食い込み、遙かに巨大な躰を蹴り倒していた。

白い横顔は汗ひとつかいておらず、息すら乱れていない。

倒された騎士はおそらく用心棒だったのだろう。残った数人はその場を逃げ出したが見る間に追いつかれる。スタンに設定したと思しきスパッドが滑らかな動きで首筋に叩き込まれ、短い悲鳴の後には男たちが倒れていった。刀を向けた者に對してはそれをレーザーブレードで叩き落し、逃げる背中に容赦なく突き立てた。この間の数分。最後に一人残つたのは、一番最初に口を開いた痩せぎすの男だった。流れるような、舞うような動きで彼は背後に迫る男へと向き直り、振り下ろされる刃を優雅に受け流した。

「ま、待て！おれは騎士じやない！オレたちは法に触れるようなことはしてねえ！」

攻撃を一つ残らず見切られ後がなくなつた男が、悲鳴混じりに叫ぶ。

「——貴様らみたまに連中を嫌というほど見てきた」

応えたのは、酷く冷たい声だった。

だがその下に押し殺した激情の片鱗が確かに滲んでいたことは、聞く者が聞けば気が付いたかもしれない。

男の網膜に張り付いたその姿は、人の一人や二人殺しても違和感のない冷徹さを漂わせていた。顔が美しい分、恐ろしいまでに凄みが増す。

黒髪の青年——零は燃えるような怒りを感じていた。くだらない

ことにうつつを抜かす人間たち。己を遥かに凌駕する生命を生み出していくおきながら、それに馬鹿げた制御を施すのは何故か。恐れてい

るからなのだ、ファティマたちの持つ能力を。完璧な美貌と騎士並

みの力、無限といわれる寿命、老いを知らない肉体を備えた彼らに、

生存競争の覇権を奪われるのが怖いからだ。

「おまえ、騎士なんだろう……?! 騎士が民間人にケガさせたら、二度と表舞台に立てなくなる——」

「——それがどうした。おれには関係ない」

男の表情が一瞬にして驚愕と恐怖で凍りついた。だが、零が無表情のまま手の中の刃を放とうとした瞬間、その顔が醜く笑い歪んだ。

「かかつたな……！」

背後から殺気が迫っていた。どこにそんな力が残っていたのか、回し蹴りで倒された巨体の男が、倒れたままの姿勢から、傍らに倒れ臥した仲間の背に刺さった刀を零目がけて投げたのだった。零の注意が背後に逸れた途端、たった今まで怯え竦んでいたことも忘れ、瘦せた男が手にした武器で斬りかかった。

「死ね！ 小僧！」

その時、小さく風を切る音がしたのを、零の耳が捉えた。

「ぎやっ!!」

ヒュツ、という音の直後、バチバチッ、と放電音が響いた。

男の振りかざした刀は零の躰に届くことなく、地面に転がり落ちた。

零がスピードを構えるより一瞬早く、男の頭には何者かのスパットの柄が投げつけられていた。スタン・モードになつていてと思われるその一撃で、男はゆつくりと、声もなく倒れた。

「油断したな、坊や」

崩れかけた柱の陰から、上背のある大柄な男が姿を現した。額に乗せていた砂塵避けのゴーグルをゆつくりと外す。手にした長い刀と、頬に一筋走る傷跡が目を惹いた。蜂蜜のような色のブロンド髪、髪より少し濃い色の髪に被われた顔立ちは、アングロサクソン系の血

を纏わせる。何より、零を見据えるその瞳は、どんよりと濁っているが、その裡にある狂氣を確かに滲ませていた。

奈落のような虚ろな視線で零を捉え、頬傷の男は言つた。

「こいつは驚いたな……おまえ、ファティマか」

一人の間の空気が、凍り付く。

広場に点々と倒れる男たちは最後までこの青年を人間と信じて疑わなかつたようだが、短い戦いの様子を観察しながら、厚い布地に隠された躰が、マントが翻るたびに一瞬だけ露わになるのをブツカーは見逃さなかつた。もつとも、あの男たちはそれを認める動体視力も精神的余裕もなかつたようだが。

「そんな躰つきをしているのはファティマぐらいだ。よく見れば、マント越しでも判る」

青年は無言のままだ。

彼がファティマだとすれば、マインドコントロールが人間に對して刃を向けることを許さないはずだ。ということは、戦闘の後遺症で壊れたか、とブツカーは内心で舌打ちした。FAFが必要としているのは、その頭の中にある戦闘データだ。無駄足になつたのでなければいいがと思う。

それでも、恐るべきはあの戦闘能力だろう。本来存在してはならない、騎士以上の戦闘能力を持つファティマ。しかし世界で数人しかいない天才マイトたちの作り上げたファティマの中には、ファティマの能力データを示す「パワーゲージ」が最高の「A」を超える——騎士級の「2A」、それを上回る「3A」を持つ超級ファティマがごく少數、存在しているというのは公然の秘密だ。(あの動きは2Aどころのパワージャーだ。並の騎士なら難なく倒されるだろう)

ブツカーは、渡された資料の内容を思い返した。脱出したと思わ

れるファティマは男性型、マイトは、当代最高の誉れ高いリン・ジャクソン——間合いを保つたまま、ブッカーは続ける。

「……あれに乗つてたのはおまえだな。壊れファティマなら大人しく保護を受ける。しかし人間に手をかけるとはな——大したものだ。あの調子で何人やつた、これまでに」

返答はない。

弓が引き絞られ、放たれる瞬間に、緊張を孕んだ空気が限界まで膨張する。

瞬間、一人の殺気が無人の広場に充満し、激しくぶつかり合つた。空気を震わせるようなそれに、屋根で羽根を休めていた鳥たちが一斉に飛び立つと狂つたように鳴き始めた。何羽かは、殺気に直撃されて、墜落した。

青年はマントを脱ぎ捨てると同時に、屋根の上へと跳躍した。マントの下に隠れていたファティマースツの、水が流れるような異様で美しい光沢は、砂と埃を被つていてようとも消えていない。脱ぎ捨てる瞬間に、マントの裏地に隠してあつた細身の短剣を両手に構え、ブッカー目掛けて猛攻を開始する。

「面白い——騎士に剣を向けるか。坊や」

動じることなく、刃渡り九十七センチほどの刀の柄に、ブッカーはゆづくりと手をかけた。

右手を躰の前で腰に回し、刀の鍔のすぐ下を握ると、さつと引き抜いた。そして、切つ先を零に向ける。それから左手を、刀の柄の右手の直ぐ下に添えた。

見ただけでもその鋭さを窺わせる刃が、雲間から射し込んだ夕陽を受けて光った。
「……おれは、おまえの頭の中にあるデータに用があるだけだ。二度は言わん。まだ暴れるというなら、手足の一本や二本、覚悟してもらうぞ」

これが返答などでも言うように、優雅とも思える動作で青年が短剣を投げた。刃は一瞬姿を消し、ブッカーに向かつて猛然と飛んできた。ブッカーは微動だにしない。彼には受けて立つ姿勢がすでに出来ていた。刀を抜いたとき、彼の躰は自動的に構えを作る。さもないと躰の均衡を崩し、自分の手足を傷つけてしまうことになりか

ねないのだ。足を平行にして、まっすぐ前を見詰める。右足を左足の前に置き、刀は陰茎の延長のように股間の位置まで下げて握る。ブッカーは刀の先端を上げ、刀身の側面で襲い来る剣を払つた。短剣はゆづくりと回転しながら、彼の躰を掠め、次第に失速して落ちた。

放った短剣を一本残らず叩き落され、零はすかさず跳躍して、相手の刀の射程範囲内から逃れた。男は躰の横に真っ直ぐ刀を持ち上げた奇妙な構えを作る。零の着地ボイント目掛けて振りかざされた刃が、その持ち主もろとも瞬時に姿を消す。

(ディレイ・アタック!?)

残像を残して、こちらの懷に飛び込んでくるのが「見え」た。強力な騎士でなければ会得できない超絶的な剣技だが、分身ですら見切ることの出来る動体視力を持つ零には残像は効かない。反撃に出ようとした瞬間、それより速くソニック・ブレードが零自がけて放たれた。ぎりぎりで躰しながら、零は間合いを開ける。手刀によつて生み出された巨大な衝撃波がわずかにこめかみを掠め、黒髪が一筋焦げて蒸発する。

(こいつ……天位騎士か!)

躰されたと見るや、男は大きく後ろに跳躍して、零との間に間合いをとつた。

零は、素浪人としか言いようのない容貌をした眼前の男と対峙して、今まで見てきた騎士とは全く異質な気配を感じていた。

全力でからなければ、殺されたとしても不思議はない。それほど殺気だつた。だが生命の危機を感じながらも、零は、自分が今、己よりも遥かに強い相手と向き合つているのかもしれないという、かつて感じたことのない興奮を覚えていた。たとえこの男が、刃向かうべきではない相手、天位騎士であろうと、負けることはできなかつた。

零の聴覚が、ぎりり、と刀の柄を握る手に力が籠められる音を捉える。
ただの鋼で、この剣が受け止められるものかと零は思った。男の振るう刀はよく鍛えられた鋼だと見受けられたが、零の持つ短剣の

刃はメトロ・テカ・クロム鋼である。強度はこちらに断然の分があった。衝撃波などの剣技を用いざまともぶつかれば、ともすれば一撃で相手の刀は真っ二つに折れることだろう。

残る最後の短剣を構え、地を蹴った。

頬傷の男は、手にした刀を横にして掲げ、柄を顔の左上、刃を右下にして屋根型を作つて構えた。鋼同士のぶつかる音。零の一撃がこの屋根で雨だれのように跳ねた瞬間、男は横へ避けて相手を躰し、無防備な脇腹に向かつて刀を振り下ろした。だが、零の動きが一瞬早く、刀は身を翻した零が飛び退いた後の空を切つた。男はすかさず第二の攻撃を繰り出してきた。今度は迷わず正面から、零の胸郭を貞つ直ぐに突いてくる。

(――これで終わりだ！)

零の胸の正面で刃が弾かれた。鋭い剣戟が響き渡る。鈍く光る銀色が宙を舞つた。

丸腰になつた男に向かつて、キル・モードにセットした零のスピードが繰り出される。手刀を振るう間を与える訳にはいかない。今殺らなければこちらが殺られるだろう。だが男は、左手をスパッドのレーザーブレードに向かつて自分から突きだした。(何……っ?)

肉の焦げる匂いと、音。男は掌を突き抜けた光の刃に構わらず体重をかけながら、唸り声と共に零に向かつて踏み込む。

「うおおおおおおっ！」

渾身の力を込めた拳が、零の腹に叩き込まれた。

「うわっ！」

零は反射的にスピードを離し、後ろにステップを切りながら打ち込まれた拳を避けた。が、男は踏み込んだ足を軸足にして、体勢を低くして回し蹴りを放つた。

体格の差で、男の足が零の足を払つた。受け身を取る間もなく、零の躰は地に倒される。

「く……っ！」

咄嗟に躰を支えた右腕で体勢を立て直そうとするよりも早く、ひたり、と首筋に冷たい鋼の感触が当たつた。たつた今取り落とし

た、零のスパッドの柄だつた。

完敗だった。零は諦めたように目を瞑る。

「殺せ」

「それが望みか？」

柄を押し付けたまま、男が言った。

「そういうわけにもいかん。言つただろう、おまえの見たものについて、おれたちは知る必要がある」

知つたことかと零は無言のままでいた。すると、ふつ、と小さく息を吐く音がした。笑つたのだろうか、この男が。

「まあいい。しばらく眠つていろ」

と、頭上から声がした。

スタン・モードに切り替えたスパッドを首筋に当てるど、黒髪のファティマは呆気なく失神した。力を失つた躰を仰向けると、目を覚ました時に慣れられることのないよう、その手首にパラライズ・ワームを取り付けた。これは神経系に働きかけ、全身を麻痺させることが可能な小型拘束具で、常人を遥かに超える筋力をもつ騎士ですら身動きがとれなくなるほどの強力な効果を發揮する。ともかくフェアリイに運ばなくてはならない。データの確保はそれからだ。

「まずは……ジャクソン博士の所か」

マイトイにとつて、己の手がけたファティマは我が子も同然だといふ。傷ついて親元に戻されたファティマを見て、マイトイたちは普通の親のように嘆き悲しむものなのかな。それとも、生命を造りだし神の領域に踏み込んだとされる彼らは、取り乱すこともなく自らの「作品」に調整を施すのだろうか。

おれにとつてはどうでもいいことだがな、とブッカーは独り言ちつていたマントを投げてやつた。それから、襲われかけていたロスト・ファティマの少女に、纏ついていたマントを投げてやつた。

「被つておけ。おまえは、確かな筋に保護されるよう手配してやる。

ここで見たことは——他言無用だ。いいな」

ブッカーはその時ようやく、左の掌が焼けるように熱いことに気

付き目を遣った。先刻、光剣の刃に貫かれた傷からじわじわと血が溢れ始めている。

おかしなファティマだった。壊れている感じではない。しかし普通でないことも確かだ。「天位」を持つ自分と互角に渡り合うファティマ、か。

彼は、止血の必要もしばし忘れ、傷口を見つめながらそんなことを考えていた。

そして目的を果たしたブツカ一は、砂嵐舞う地を後にした。眠れる黒髪のファティマを伴つて。



(――ここは……どこだ――?)

躰が重い。肘から先を動かすと力を籠めれば、軋むような違和感が走つた。

「目が覚めた? 気分はどうかしら」

懐かしい声がした。

これは夢か、零は思う。

すると、夢ではないわ、と優しい声が降つて来る。良い香りのする部屋だった。忘れようとしても、忘れられるはずもない場所の気配がした。

自己は、ここで生まれ育つたのだ。

妖精という名の惑星で。

地球上にいたはずの自分が何故、フェアリイにいる……?

[……ジャクソン、博士……?]

「バラライズ・ワームの後遺症ね……元のように動けるようになるまでは少し時間がかかるわ。もう何の心配も要らないのよ。安心してお眠りなさい」

零が身を横たえたベッドの傍ら、椅子に腰掛けた初老の女性が、ピロウに預けた零の頭を優しく撫でている。

おれはどうしてここに、と訊こうとする零に、後でちゃんと説明してあげるわ、という声が返つた。

ゆっくり息を吐き、躰の力を抜くとまた眠気が訪れた。まどろみながら零は、遠い昔に別れた懐かしい「半身」の気配を、酷く身近に感じていたのだった。

ロスト・ファティマとなつた零を、ブツカ一はF A F の名を掲げた超法規的手段を用いてフェアリイに連れ帰つた。人間を攻撃したことについては報告していない。ただ一言、放浪のせいで調整が必要になつてゐるらしい、とだけ付け加えた。そして准将からの返答として、そのファティマをフェアリイに居を構えるファティマ・マイト、リン・ジャクソン博士の元へ運んで調整を受けさせるようにとの追加任務が下された。

惑星フェアリイ。ファティマ・マイト、リン・ジャクソンは地下居住区にはその地位に見合う大邸宅と工房を、そして地上部にも彼女専用の広大なファクトリーと住居を所有している。彼女の「作品」たちは多くはF A F の軍人の元へと嫁ぎ、そのこともあってか博士とF A F の繩がりは深い。F A F で開発されるM H のための専用ファティマの製作監修を依頼されることも多い彼女のファクトリーは、M H を収容できる格納庫すら備え、機密を扱うマイスターたちが常駐していた。

追加任務を受けたブツカ一は、地球から連れ戻した件のファティマの再調整を待ちながら、ジャクソン博士の元に滞在して十日ほどを過ごしていた。ブツカ一はF A F の将校であり、なおかつモーターヘッド・マイスターの資格も所有するヘッドライナーであつた。ゆえに格納庫の中に入る許可を与えられており、他にすることもないので、開発中の機体を日がな一日眺めて終わる日も多かつた。

格納庫の一隅に、黒を基調とした優美なM H が、凜とした姿で立つていた。F A F の主力機、シルフィードの後継機かと思つたが、良くなぞ見ると違う。どこか禍禍しい——そう、ジャムだ。ジャムの不吉な黒いM H と似ているのだ。

開発コード名は「メイヴ」。風の妖精を統べる女神の名前。

極限にまで運動性を高めるためにウルトラ・ピーキーなチューニングを施され、必要最小限の装甲しか持たないMH。特殊戦が開発指揮を取った、偵察任務用に特化した機体は、高度な索敵システムであるグラン・シーカーを装備し、駆動音のカモフラージュ、光学迷彩のごとき装甲表面のモールド処理を施された、隠密仕様の機体である。

獰猛そうな奴だ、とブッカーは思う。格納庫の二階からメイヴと正面から向き合い、だがこの最新型が何故ファティマ・マイトの工房にあるのかと考えていると、背後から声がした。振り返ると、杖を手にした上品な婦人が、にこにこと人の好い微笑を浮かべて立っていた。

「ありがとうございます、あの子を連れ帰つてくれて。お礼を言います。ジェイムズ・ブッカー少佐」「いや——ずいぶんと手荒に扱つてしまつたようだ。しかしああでもしなければわたしの身が危なかつた」

「あなた方がご希望のデータは無事です。安心していただけたから。あの子もいろいろと辛い思いはしたようだけれど、あの通り無事に戻つてくれました」

ジャクソン博士はそこでブッカーの左手に目を留め、あら、と声を上げた。

「そのお怪我はあるの子の仕業ね……まだ痛みますか？」

いや、と返事をして、ブッカーは博士の方を見る。
装いは華美ではないが、そこはかとなく漂う気品が彼女の威厳を擣るぎないものにしているようだった。そのあまりの才ゆえに「狂氣」という言葉を冠されることすらあるという天才科学者。しかし外見からはその片鱗も窺い知ることはできない。

「ブッカー少佐、あなたは、今はファティマを連れておいでではないのね」「わたしは不良騎士でしてね。F A F から干される日もそう遠くはないでしよう。これが最後の任務になるかもしれない」

「そう、ファティマはいない——彼女を失つてからは、ずっと。」「そんなことはないわ。それに、あなたほどの騎士なら、これまで

何人というファティマがあなたをマスターと呼ぼうとしたのではなくなつて？」
「……そんなこともあつたかもしれません。だが、もうわたしにそぞの資格はない」

何故? とは、博士は訊かなかつた。少しの沈黙の後、代わりに彼女が口にしたのは、全く別の問いただつた。

「……あの子は地球で『ジャム』を見たのかしら」

ブッカーは、それはわたしの判断することではありません、と返した。

「——博士、お尋ねしたいことがある」

そして彼は、自分には関係ない、と思いながら、ずっと頭の隅を離れなかつた疑問を吐き出した。

「あれは、一体何者だ? 何か本能的な恐怖を覚えさせる……普通のファティマとは思えない、あれは——」
ジャクソン博士はすう、と目を細め、ブッカーと同じようく黒い女神——メイヴを見据えて言った。

「あの子は、わたしの最後の『作品』。そして、あの子は『壊れて』もいない。あれがあの子の……『零』の仕様です」

仕様だと、とブッカーが問い合わせたのと同時に、格納庫のアラートがけたたましく鳴り響いた。

『総員退避! これより非常時防衛体制に入る! 格納庫内から即刻退去せよ!』

響き渡る警報。ブッカーたちから少し離れた所で控えていた執事が駆け寄る。

「お館様、ここは間もなく閉鎖されます。お早く」

何事かとブッカーが問う。

「レーダーが高エネルギー反応を捉えました。おそらく、ジャムかと」

淡々と告げられた内容は、その様子とは裏腹にこの上ない危機が迫つてゐることを伝えていた。

「馬鹿な! この区域はごく最近戦闘があつたばかりだ、どうしてまたここに……」

数百年に渡つて積み重ねられたジャムとの戦闘記録を分析し、F

A.F. 戦術開発団は、ジャムの出現地点と出現間隔から一定のパターンを割り出していた。即ち、一度ジャムが襲来したポイントに彼らが再び現れるまでの間には、何故か一定期間が掛かるのである。

この発見によつて、F.A.F.の防衛体制からはかなりの無駄が省かれ、防戦一方だった人間側に、反撃の機会を与えることとなつた。

だが今、その均衡が破られようとしている。

「一番近い基地からの支援はどうした！ 要請はしたのか！」

ブツカーレは、階下で慌しく機器に予備電源を接続して回つている整備士の一人に向かつて叫んだ。

「それがこの近辺に嵐が発生していて、鉱山の砂が巻き上げられたせいでテレポート座標が狂うのだ」

「ドーリーで向かわせてもこの距離では間に合わん！ ここに、まと

もに動けるM.H.はないのか！」

「今はこのメイヴだけです。後は皆組み上げ途中で、メイヴにしても、まだベンチテストすら——第一、『零』様が……」

その時格納庫の扉口に現れた人影があつた。言い争う声がする。
「博士！ われが出てる。メイヴの始動キーをくれ！」
「博士！ われが出てる。メイヴの始動キーをくれ！」

ファティマ「零」。目覚めている姿を見るのはブツカーレにとって二度目だつた。ファティマなら持ち得ないはずの、強い意思を宿した目——ああ、そうかとブツカーレは理解した。何故こんなにも彼の目に惹きつけられるのか、その理由がようやく解つた。彼のアイレンズはごく薄い色しか載せていない。その、ヒトとほとんど変わらずに見える瞳が持つている光は、今の自分には眩し過ぎるのだ。彼はあるで、ヒトに従う存在には見えない。恐ろしく誇り高く、強く、高貴な存在だつた。

先刻の博士の言葉が甦る。仕様、と言つたか？ そして、メイヴの元へ走る零を見た。ファティマが単独でM.H.に乘ろうとするこ自身普通ではない。騎士とて獨りでM.H.をコントロールするのは不可能に近いのだ。

「騎士もいないのに、独りで出る気か？ 死ぬぞ！」
「ブツカーレは思わず呼びかけていた。零が、声のした方を見上げる。

「ヘッドライナーなんかいなくても、おれ独りで十分だ」

「思い上がるな、ファティマだけで何ができる！」

「あんたの指図を受ける筋合いはない。——おれはただの『人形』とは違う。おれもメイヴも、負けはしない」

「——いいわ。お行きなさい、零」

ジャクソン博士の、穏やかだが威厳のある声が、零とブツカーレの言い争いを止めた。零は一つ頷き、メイヴの方へと踵を返した。

「博士！ 何ということを！」

驚くブツカーレをよそに、格納庫はたちまち慌しい空氣で満たされしていく。搭載武装の確認は済んだか、この嵐では照準が狂う、火器は不要だなどの声が飛び交い、瞬く間に出撃準備が進められる。ブツカーレは腕すくでも止めるべきかとまで考えた。

「博士、何を考えておられるのか！ わたしはまだ任務がある、彼に死なれては困るのです」
しかし動搖の全く見えない顔で、博士はゆっくりと首を横に振つた。

「あの子とメイヴを止められる者はいません。それに、メイヴは必ずあの子を守ってくれるでしょう」

上昇する昇降台の上、零は騎士用コクピットのシートに身を預け、安全装置を解除する。戦闘服に着替えていた間などなかつた。
「戦闘モード、対M.H.にセット。ジェネレータ始動する。ペイルに予備エネルギーをチャージ。イレーザーエンジン始動準備完了。エンジン始動三分前——ゆくぞ、メイヴ」

「メイヴ、出ます！」

メカニックの一人が合図すると同時に格納庫の天井が開く。何層にも重なつた耐爆扉が開き、メイヴを乗せたエレベータが上昇していく。
イレーザーインジンが唸りを上げる。

青白い焰を纏つた、世にも美しいM.H.——風を統べる女王が、目を、醒ます。

嵐が近づいている。

強風に倒される草原を映していた三六〇度全天透過型のモニターの前方で、不意に空間が不自然に歪曲した。

（同じだ……あの時と……！）

モニタが高エネルギー反応を感じて、アラートを点滅させる。零の脳裏に、悪夢のような光景がフラッシュバックした。口唇を噛んで動搖に耐える。自分が不安定になるわけにはいかない。メイヴはこれが初陣なのだ。

一際重く大きな音が響いて、ブールされていたエネルギーがメイヴの全身を巡る。ゴオン、ゴオン、と規則正しく響く音はまるで心臓の鼓動のようだった。零は戦闘の始まりを予感し、メイヴばかりでなく、自らにも言い聞かせる。

「油断するな、メイヴ——奴は、手強いぞ」

メイヴが出撃するのをなす術もなく見送った後、ブッカーは、ジヤクソン博士に伴われて管制室へと向かった。ここにはこんな設備まであるのかと彼は小さな驚きを覚えた。先ほど避難を促した執事が「ここを一刻も早くお出になつてくれさせ」と博士に乞う。だが彼女は聞き入れなかつた。

「その必要はありません。それに、『息子』がわたしたちを守るうとしてくれているのに、逃げることなどできないわ。わたしにはここからあの子たちを見守る義務があります——あなたはどうなさる？

（ブッカー少佐）

「……お邪魔でなければ、わたしもここで二緒させていただく」

そう仰ると思っていたわ、とジヤクソン博士は微笑んだ。

そして、地上で展開されている戦闘をモニタしているディスプレイの前に立ち、彼女は静かな声で語り始めた。

「お話を続きをしましよう、少佐。わたしに訊きたいことがおありますね」

「……わたしはあのファティマが人間に手を掛けるのを見た。壊れているのでないとすれば、説明がつかない」

「そう……彼らは運が悪かったのね。よほどあの子の逆鱗に触れたのでしょうか。零には、マインドコントロールを与えていないのです」淡々とした口調で衝撃的な事実を明かされたことで、ブッカーは驚愕のあまり、しばし言葉を失つた。

「マインドコントロールを受けていない……？ 馬鹿な！ そんな状態でMHに乗れば、精神にかかる負荷に耐え切れず自己崩壊を起こしてしまう——」

「あなたはあの子とまみえたフェアアリイ最初の騎士ということになります。思い出してごらんなさい。あの子はどんな様子だつたか」最初はファティマだとは思わなかつた。少しの躊躇もなく人間に攻撃を仕掛けることなど、ファティマにできるはずがない。だが零はそれをやつてのけた。今の話が事実なら、壊れていたのではなく、最初から——その駄目が、塩基配列の一つから人間に造られたということを除けば、彼はヒトと何ら変わることのない存在だということになるではないか。

戦争や騎士のための殺戮はファティマの義務であり、その義務に伴う行為は、ともすればファティマの精神にかかる負荷を増大させ、彼らを狂わせかねない。本来、ファティマはその肉体も精神も非常に脆い生命体なのだ。「騎士の命令には絶対服従」「MHによる戦闘の破壊殺戮を避けてはならない」「これによる人間の殺害は義務である」といった感情制御・思考制御のためのシステム、マインドコントロールが、彼らの繊細な心に生じる矛盾、葛藤、負の感情を相殺し、ファティマたちが主を失つてもなお次の騎士を求めて生き長らえるための拠り所となつてゐるのである。

マインドコントロールを受けていないことは、その支えを持たず、心に蓄積する負の感情を抱えたままでファティマが果たすべき役割を遂行する、すなわち、戦闘兵器として生きることを強いるもの等しい。そう指摘してから、ブッカーは詰問口調になるのも構わず続けた。

「それが解らないあなたではないだろう、博士——」

「マインドコントロールがなければ、ファティマは戦闘の重圧に潰されて崩壊すると思われている。でも、本当にそんのかしら。それは、わたしたちがあえて彼らをこう造つたからだとは言えないか

しら。ファティマに強制な心を与えることは決して不可能ではないわ。だとすれば、ヘッドライナーとファティマの違いは、後者が人の手で造られたということでしかない

博士の口調が不穏な色を帯び始める。

「零は、ファティマが絶対服従すべき対象である人間すら、己一人の判断で殺すことのできるファティマ。騎士を凌ぐ力を持ちながら、騎士に縋らずとも生きて戦えるファティマが最強の兵器であるMHと一緒にすれば、人間を超える戦闘兵器になることができるわ」

淡淡と語られる言葉には、科学者の倫理も何もかもが欠落している。悪夢のような内容にブッカーは戦慄し、何故自分にこんな話を聞かせるのか、と困惑した。

「博士……あなたともあろう方が、本気でそう思つておられるのか。そんなことが許されると、手塙にかけた彼らをただの兵器にしてもよいと……」

「あなたもマイスターなら解るのではないかしら。マイトなんて所詮、狂人でしかない。己の理論の正しさを証明するためなら、倫理や道徳も必要とあらば捨て去れる人間なのよ。ファティマは人間の限界から自由になつた最も優れた生命体。そんな彼らを下らない制約で縛るなどという、愚かしいことはわたしには我慢できないの」

シガナルボーダー五本を身に着けるマイトの狂気を垣間見た気がし、ブッカーは背筋に寒いものが走るのを感じる。

「おれには……わたしには理解できない。彼らは弱くはないが、強くもない。我々人間がそのように造つてしまつた以上、そして彼らを兵器として扱うからには、その代償に彼らを守つてやらなければならないと、わたしはそう思つていた」

自分の言葉に、かつてのパートナーを思い出した。非は自分に

あつた。身勝手な誤解で彼女を追い詰めた。そして、彼女は永遠に喪われてしまつた。思い惱む騎士はファティマを滅ぼすのだと、ブッカーはあまりに大きな代償をもつて思い知らされたのだ、あの時に。

わりと相好を崩し、「さすがですね、ブッカー少佐」と言った。

「……やはり優れた騎士なのですね、あなたは——以前と変わらずに」

目の前の天才科学者は、いつしか元の穏やかな貴婦人に戻つてゐる。

「博士……？」

「あなたを試すつもりはなかつたのだけれど、ごめんなさい。驚かせたかしら。わたしは本気でこんなことを考へているわけではないのよ。ただ、あなたの本心が知りたかったのです」

言葉の意味が解らず、ブッカーはただ立ち尽くす。

「そう、あなたは正しい。零はわたしを恨んでいるかもしれないわね。なぜただのファティマとして造つてくれなかつたのかと。あの子は人間と同じ心を持っているから、人間の醜い面——狡さや愚かさ、弱さも全て知つてしまつたのでしよう。あの子はもう、人間を見限ろうとしている。そして今、メイヴだけを扼り所にして戦つているわ。メイヴは、零の設計と同じ頃に開発の始まつた機体なの。あの子とメイヴは、兄弟、いえ、半身のようなものなのよ」

眼前に映し出された、禍々しくも神々しい、黒い宝石のような電気騎士を見つめたまま、博士は語り続ける。

「あの子が何か恐怖をあなたに感じさせたと、いうなら、それはすなわちあなたのヘッドライナーとしての能力の高さを意味しています。わたしは、その恐怖を知ることのできる騎士にしかあの子を嫁がせなかつたし、あの子の意思も同じでした。つまりあなたは、あの子の主になる資格があるということなのです」

キィイイイイイイイ、と空間が歪む波動が空気を揺るがせ、ジャムの黒い機体が三機出現した。

（これが……ジャム！）

衝撃波と共に、少し離れた前方の森を薙ぎ倒すように、漆黒のMが姿を現す。

遠い昔のこととはいえ、未だ忘れるのできない辛い過去の記憶を噛み締めながら、しばしの沈黙を彼は耐えた。すると博士はふ

色を切り抜いたかのようない形は無論見えているのだが、立体的にどのような形をしているM·Hなのは一瞥しただけではわからない。

輪郭の曖昧な、黒一色の不気味な機体を再び目の当たりにした零の脳裏に、己を脱出させて死んだ最後の騎士の言葉が甦る。「次の主を探せ」と。

人間には絶対に理解できない、正体不明の異星体。メイヴはそれを女王のように睥睨している。

両者の間の張り詰めた空気が最高潮に達した。

零は、即座に攻撃を開始した。メイヴが放つたミサイルを叩き落としているジャム機の隙をついてホーミングブームランを放つ。ミサイルの隙間をつくようにして飛んだそれは、狙った敵機の右腕の肘から先を吹き飛ばした。戻ってきたブームランをキヤッヂする間も、機体のバランスコントロールは完璧に保たれている。3Aというパワーゲージは伊達ではないのだろう。管制室からその様子を見ていたブッカーは、演算と戦闘、全てのコントロールを単独でやつてのける姿を目撃した。零が驚異的な性能を備えたファティマであることを認めざるを得なかつた。

その名前に相応しく、風の如く舞う華奢なM·Hの姿は現実の光景とは思えないほど美しい。ブッカーはその美しさに寒気をも覚えながら、目を離すことができなかつた。

初陣にして、メイヴは凄まじい格闘能力を持つていることを零は実感した。しかし、次第に零の肺にかかる負荷が増していくのも避けられなかつた。相手は複数であり、次々に繰り出されてくる攻撃を捌くのが精一杯になるのも時間の問題だらう。こちらは元より長期戦を想定して造られているのではない機体であり、格闘戦は圧倒的に不利だというのも解つている。この機体がこのような状況で本來取るべき道は、最高速度でジャムを振り切ることだつた。しかし零は、今は何としても勝たねばならないと思つていて。

この地を守り、そして自分が生き延びるために。だが騎士を乗せず最初の実戦に臨んでいるという状況は、たと

え零自身がどれほど優れたファティマだとしても、あまりにも危険なことは誰の目にも明らかだつた。長引かせるだけ不利だ、と零は思う。そして、自分の僕に巻き込んでしまつたことをメイヴに詫び、剣を固く握り直した。実剣だ。ひときわ重く大きな音が響いて、再びエネルギーがメイヴの全身を巡る。

刃先が一閃し、ジャム機を確実に捉えたかに見えた。だが渾身の一撃は躊躇され、返す刃の二撃目が、残り二機となつたジャム機の方の左腕の装甲を辛うじて掠るにとどまつた。しまつた、と思った瞬間、零の判断が遅れる。敵機の剣を避けきれなかつた。襲い来る切先をペイルで辛うじて弾き返す。咄嗟にロックしたおかげで弾き飛ばされるのは防げたが、ペイルは破損。左腕にダメージ。各部に軋轆が起き、さらに損傷が酷くなる。

「く……っ！」

今の接触で関節の受け流しが上手くいかず、バックラッシュが中に入る零にまで到達した。肩に走る激痛に思わず悲鳴を上げかける。意識が一瞬揺らいだ。自動的に成されるはずの、フィードバックの切断が間に合わなかつたのだ。

零は左肩を押さえた手を外し、ぎりりと奥歯を固く噛み締めた。

「すまない、メイヴ……おまえは生まれたばかりなのに」

現実の痛みより、絶望の痛みが全身を苛むようだつた。

激痛を通り過ごし、コンソールに指を触れる寸前、ピピピ、といふ小さな電子音が響いた。緊急通信回線が開く。

『おい！ 無事か？』

メイヴのコクピットに強制的に割り込んできたのは、オペレータの声ではなくどこかで聞いた覚えのある声だつた。さつきの、あの男だ。博士が言つていた、ブッカーという名前の、軍人。

『すぐ嵐が来る！ スキヤニングが効かなくなる隙に、一日退避するんだ！』

言葉の通り、鉱石の破片を巻き上げる砂塵混じりの風が次第に視界を遮り始める。早くも数十メートル先を視認することは不可能になつていて。ジャムも同じ状態らしく、索敵のため、周囲を探る二

機の敵影が徐々にその陣をばらしていく。

ブッカー少佐が何を考えているにせよ、一旦退いて態勢を立て直すというのは正しい判断だと零は認め従うことにする。それに、いくらエアシールドを施してあるとはいっても、メイヴが怖がっている。嵐が通り過ぎればその問題は解決するが、その時が勝負になる。エリアイ空軍の援護も間に合うという保証はない。一息に片をつけねば、終わりだ。

零は慎重にメイヴを移動させた。少し離れた所に森林地帯が広がる、青みがかつた緑色の森林も、今は嵐に巻かれて本来の金属的光沢を失い、霞んで見える。木々の間にメイヴを隠せば、嵐による機体へのダメージも抑えられよう。

『いいか、今そちらに向かっていい』

突然声がしたので零は驚く。回線はまだ繋がっていたのだ。

『この嵐だと、おれの足でもあと五分はかかる。少し待て』

何だと、と問い合わせる前に通信は切れた。

「一体、何を考えている……巻き込まれて死にたいのか」

この嵐の中ではどんな大型のデイグも作動しないだろう。騎士の身体能力は常人を遥かに上回るとはいえ、まさか走つて来るとでもいうのだろうか。それに、何のために？ 彼がどういうつもりであんなことを言つたのか、その時の零には全く理解できなかつた。

砂嵐が見る間に空を覆い、大地は瞬間とは思えない薄暗さに包まれていった。

零のいるコクピットの中、直振通話を知らせる音がした。外を確認すると、視界は悪いが、蹲るメイヴの足元に辛うじて人の姿が見えた。本当にここまで来たのか。ジェイムズ・ブッカー。自分をここに連れ帰つた男、それ以前に、地球でこの自分に膝を折らせた騎士——

『おい、おまえ。ハッチを開けろ！』
『何だと？』
『そのコクピットを開けるんだ！ 早く！』
『あんたの指図は受けないと言つたはずだ。何のつもりだ！』

『解らないのか！ こいつは初陣なんだろう。つまり戦闘経験がない。だから、騎士にコントロールされる自分の動きをまだよく解っていないんだ。その上おまえがこれ以上無理な機動をさせてみろ、こいつに——メイヴに、初陣で消えないトラウマを残すつもりか？』

『……つ』

『手伝つてやる、席を替われ！』

何故そんなことをしたのか解らない。勢いに押されるまま、零はその言葉に従つてしまつた。ブッカーは、騎士の操縦席にいた零を、MHの脊髄伝いに頭部のファティマ用コントロールームに追いやつた。

騎士用のコントロールユニットのシートは、ファティマである零がここ数日間調整に携わっていたために彼の躰のサイズに合わせたものになつてゐる。とはいえ、本格的な模擬戦などは経ていないため、零にとつてはかなりの余裕を持たせた造りになつてゐた。ブッカーはそこに何とか躰を滑り込ませることはできたが、明らかに躰に合わないこのコクピットで、まともなコントロールを行えるかどうか甚だ不安だつた。しかも最後にMHに乗つたのはいつだつたか、思い出すのも億劫なほど昔のことになつてしまつてゐる。しかし覺悟を決めるよりない。

助けてやろうなどと殊勝なことを考えたわけではない。ジャクソン博士の言葉に感化されたというわけでもないだろ。だがあのまま何もしないでいれば、そしてメイヴと——零がジャムにやられるのをただ傍観する立場に甘んじたなら、自分は今度こそ本当に、騎士としての、否、人間としての誇りすら失くしてしまふような気がしたのだ。

『……なるようになれ、だ』

一方の零はファティマシェルの中で、不安げにエンジン音を響かせるメイヴを宥めていた。

『我慢してくれメイヴ、嫌なのは俺も同じだ。この戦闘が終わつたらあいつをコクピットから蹴り落として洗浄してやるからな』だが零の言葉の甲斐なく、明らかに正常ではないエンジン音は止まらない。

(冷却シールド、油圧バイパスは正常……どうしてだメイヴ、おま

えはまだ戦えるんだぞ)

だが零の願いも虚しく、電圧の不安定さが増大し、ついにイレーザーの振動が止んでしまった。

『何だ！さっきの戦闘でオーバーヒートでも起きたのか？』
コントロールルーム内の予備電源が入り、コンソールパネルのインジケーターが小さく点滅した。先刻受けた損傷で電気系統が一部ショートしているとはいえ、予備のジェネレータは無事のはずだ。それなのに、何故――

『違う……』

『何？』

「これは、機体の損傷のせいじゃない。メイヴの、動搖が――影響している……？」

『どういうことだ？』

『メイヴは……怯えているんだ』

本来の偵察任務どころか、初陣にして圧倒的に形勢不利な戦闘を余儀なくされ、コクピットには見たこともない騎士がいる。歴戦のMHですら苦戦するであろう状況に、赤子同然のメイヴは耐えなければならないのだ。

そういうことか、と溜息混じりの声がした。

『いいか坊や、よく聞くんだ。メイヴを安心させられるのはおまえしかいない。今の状況を納得させてイレーザーを再始動できなければ――倒されるのはおれたちだ』

木々の間を抜け、轟々と鳴る風の音はファティマ・シエルの中までは届かない。エンジンも止まり、絶対の静寂の中、零は瞼を閉じて深く息を吐いた。

「……怖がるな、メイヴ。おれを――おれと、この騎士を信じてやつてくれ。頼む」

約束する。お前にこれ以上傷を付けさせはしない。
だから、お願ひだ、メイヴ。

しばしの静寂。駄目か、とブツカ―は目を閉じた。この誇り高

いMHはやはり自分を騎士と認めてはくれなかつたか、と。だがその時だつた。

『少佐……！』

零の弾んだ声がして、ブツカ―は凭れたシートから呻嗟に身を起こした。

エネルギー・バイパスのリミッタが解除され、ジェネレータが始動する際のごく微細な期待の変化を感じしたのだ。ブツカ―は思わず声を上げた。

『やつたか！』

『ああ……戦闘モードエンジン、プリセットに。パワー・バランス補正完了。プログラミリセット、アンドオールクリア。ジェネレータ充電完了。コントロールバランス変更。イレーザー点火まであと二分』

イレーザーに火が入る。

炎のような高エネルギーを纏つたイレーザー・エンジンが再始動する。ジェネレータからエネルギーがバツクロードし、機体の外に放電している。その様はまるで吹き上がる炎のようだ。スピード偏重と言えるほどに特化したメイヴの特徴だった。

『何てパワーだ……』

ブツカ―は心の底から感嘆した。衝撃と、その炎で足元の植物が消滅する。

『機体のデータをくれ』

『……前回の戦闘で出力三〇%ダウン、動力に一五%の損失、装甲八%破損。サスペンション・ポイントA、C、Dにダメージ。左腕部の損傷が激しい――少佐、メインウエポンの選択を』

淀みなぐデータを報告する声は硬い。彼はヴァージン・ファティマではないが、こんな経験は初めてに違いない。だがおれだつて似たようなものだ、とブツカ―は思った。
「ふん……派手にやつたな。だがその程度ならまだ十分戦える。実剣を使う。制動コントロールはおれに。バランスの制御はそちらに渡す」

『ジャム捕捉、位置一〇〇メートル。来る！』

エミュレーションマークが表示するポイント目掛け、メイヴが

地を蹴った。同時に零がブーストをコントロールすると、まるで宙を飛ぶような感覚で敵陣へと迫つて行ける。演舞のように精確で容赦ない、一部の隙もない鋭い動きは、何年も眠つていた騎士と、初陣の機の力によるものだとは誰が見ても思わないだろう。

「灰色の砂塵の向こうに、黒い機影が現れた。ジャムの攻撃。右肩を狙い振り下ろされるスパッドを紙一重で回避する。先制攻撃を仕掛けたジャムは、返すメイヴの剣によつて一刀両断に破壊された。零の演算の精確さにブッカーは内心驚いた。

（さすがリン・ジャクソンのファティマ……初めて見るはずのおれの動きを完璧にサポートするとはな）

しかし思えば零は彼の太刀筋を一度は見てゐるのだ。自らが対峙することによつて。

メイヴは、霞む視界の向こうに続いて出現したジャムのMHに間髪入れず襲い掛かった。横一閃にスパイドを薙ぎ払うも、回避される。手にした剣すら黒い機体は、振りかぶつた太刀に重量を乗せて、メイヴの行く手に衝撃波を放つた。着地点を抉られたと見るや、メイヴはペイルを地面に突き立てて、倒立するようにして安全な足場に着地した。

「今の距離からの打ち込みを避けるか！ 化け物じみた性能だ」

忌々しげに吐き捨てるブッカーをよそに、零は、彼のモータースキルに合わせるのが精一杯であることに恐れすら感じ始めていた。実は、もしブッカーが酷い操縦をしようものなら即座にコントロールを奪つてやろうとまで考へていたのだが、それどころか、一瞬でも気を抜けば置いて行かれそうになる。過去、数人の騎士と戦場に立つたが、こんな経験は初めてだった。

（何なんだ一体……メイヴは確かに軽いが、だからと言つてどうしてあんな動きができる？）

零は、彼と剣を交えた時のことを思い出していた。天位を持つということだけでは説明のつかない強さが、この男には備わつていることでもいうのだろうか。

「あと一機、片付けるぞ！ コントロールを寄せさせ。パラレル・アタックをかける！」

残る最後の一機と対峙し、零はメイヴの損傷を調べた。右腕に

ダメージが溜まつてきている。重量のない軽装甲MH、メイヴの弱点だつた。慟哭のような風の音と、耳を裂くような剣戟の中、最後の一機を相手にしつつメイヴは攻めあぐねていた。打ち込むにも有効な間合いが取れず、リバウンド・ショックばかりが蓄積する。右肘と手首の発熱が酷い。ペイルにダメージが來るのも時間の問題かと思われた。躊躇はないコクピットで、ブッカーは全力を發揮できずにいる。分身を見切られたのも、メイヴが本来のスピードの半分も出せていないからだ。

『少佐、あと一回の打ち込みが限度だ——右手首の限界が近い』

『一回だと？』

『そうだ。それに、戦闘が長引いているせいで、エネルギー消費にジェネレータが追いつかない。ジェネレータの予備は使いきつてしまつたからスピードも落ちてきてている』

『……エネルギー・ジェネレータのリキッドを抜け。ペイルももう捨てて。長期戦はこの機体とこの損傷では到底無理だ。とにかくもつと軽くするんだ』

装備を外して身軽にするという戦法は感心はされないが、最後の手段としてごく稀に使われる。しかし元より軽いメイヴがこの方法をとれば、機体のバランスを制御するのが極めて困難になり、騎士やファティマへの負担は激増することになるだろう。ブッカーはそれを覚悟の上で、戦いを終わらせようとしている。

『バランスを頼む。おまえの力があるから、こんな無謀なことが出来る。それから……ファンクション・ターピンを絞れ。限界までだ』

『馬鹿な！ そんなことをしたら、コントロールが……』

『瞬間最大出力を上げるには、乱暴なやり方だが他に方法がない。メイヴの関節が参つてしまふ前に片をつけたい』

メイヴのイレイザーオー音が、全く異質なものに変わる。

『一撃離脱だ。接触時にフルブーストをかけてくれ。終わりにするぞ』

託すしかないのだろう。彼に、全てを。メイヴも、自分も。

「——あなたの流儀に任せる。補佐してやるから、思う存分やつてみる」

その声を聞いた刹那、ブッカーは、突如として周囲の風景が色を変えるのを見た。

全身の血が沸騰するほどの興奮。

心臓の鼓動が胸を突き破りそうほどに高鳴る。

忘れかけていた、騎士——ヘッドライナーとしての本能が甦つていつ瞬間だつた。MHを駆る者こそが騎士。躰に溜まつた酒精の濁が霞ませていた思考が、不気味なまでにクリアになる。こんな感覚はいつの時以来か。一度滾り始めた血液は止まることを知らず、彼は己の業の深さを思い知つた。

「……メイヴ、見ておられるだろう。あれがおまえの敵だ。おまえは、あれを、喰らい尽くすために生まれたんだ。おまえはその本能を思

うまま満たしたらしい。そのためなら、おれはこの力の全てをおまえに預けてやる」

だから今、なすべきことをなすがいい。

今この瞬間、メイヴは、獲物に飛び掛らんとする猛獸のよう見えることだろう。御せるだろうか、おれに。否、いつそこの手綱を振り解いてみせろ、とブッカーはあたかもメイヴを鼓舞するかのように、呟いた。

「少佐、一体メイヴに何を——」

ブッカーの独白はファティマ・シェルの中の零の耳にも届いた。これ以上メイヴの精神を揺さぶるような真似を許すわけにはいかない、と身を乗り出す。

だがその言葉を認識した瞬間、零の躰がびくん、と大きく震えた。「…………！」

メイヴの脳波を通して、ブッカーの精神の高揚が、零の脳にダイレクトに流れ込んでくる。ブッカーの脈動をまともに受け止めた躰は震えが止まらず、たちまち鼓動が早くなつた。息が整わらず、薄い胸が激しく上下する。五感が経験したこともないほど鮮明に、鋭敏になつっていくのが解る。そして、頭の中に響く声があつた。（おまえが必要だ。力を貸してくれ……）

叫んでいるのはメイヴなのか、彼なのか、自分なのか――

ジャムの剣先が一閃し、メイヴの一次装甲、フェイス・ガードを吹き飛ばした、その瞬間。

メイヴが、怒りに震えるようなレイイザー音を響かせた。機体が音を立てて青白い焰を吹き上げる。

そして、最後の一撃が打ち込まれた。



格納庫を満たすMHの匂い、イレーザーの脈動音。

先日のジャムとの戦闘でフェイス・ガードを吹き飛ばされたため、今は素顔が見えていた。露わになつたメイヴの素顔は、MHとは思えないほど美しい。ファティマルームのハッチを開いたまま、しかし中に乗り込むことはせずに、零はMHの肩口に腰を下ろし、装甲に躰を擱り寄せるようにして、そのひんやりとした冷たさを自らの体温に馴染ませていた。

メイヴは、FAFが無人機の導入計画の一環として極秘裏に開発してきた機体である。騎士やファティマを徒に失いつつあることに對して、軍上層部はようやく対策を練り始めたのだった。従来、騎士とファティマの二人が揃つて初めて戦闘兵器として機能するものを、一足飛びに無人化へと進めるのではなく、計画の第一段階として、ファティマが単体でコントロールことのできるMHの開発が始まられた。各分野における最高の頭脳が集められ、天才モーターハードマイトと名高いトマホーク・ジョン博士、そして、地球でもフェアリイ星でも最も高名なファティマ・マイト——零をこの世に生み出した「母」、リン・ジャクソン博士もそこに名を連ねていた。今回自分の仕出かした不始末はこの計画を確実に遅らせるだろうと零は思っていた。ファティマが単独でMHを動かすことの、現時点における限界を明らかにしてしまつたのだ。

それともあれが、己の性能の限界なのかもしれない。

しかし今回の件は明るみに出ることはないと彼は考えた。ファティマが人間の制止を振り切り勝手に独り出撃したなどといふ由々しき事実は、直接関わった者以外には知られぬまま葬られるのだろう。

自らの体温を移して温くなつた装甲に凭れたまま、零はくつくつと喉だけで笑つた。不思議と、そういう気分になつた。これは自嘲だ、と零は気付く。

『あなたの心は人間と同じなのだから、辛い思いをさせると思うわ。わたしは悪い母親ね——許して頑張、零』
博士は、成人してフェアリイを離れて行く前の零にそう言つた。
あの時は、彼女の言うことの意味が解らなかつた。そして地球でも、辛いと感じたことなどなかつた。

地球で仕えた主人たちは、零が法に反するファティマ——マインドコントロールを受けていない禁断のファティマであると承知の上で、それでもその最高ランクのスペックを望んだ。それゆえに、零は、発覚すれば処分されてもおかしくない秘密を抱えたまま、「普通の」ファティマの振りをして何十年をも地球で過ごすことができたのだ。

自分は戦争のための道具としては完璧だと思つてた。それでもついに、最後の主を失つた時初めて、この身の非力を呪つた。
それでも、守らなければ、と思つた。得体の知れぬ敵を黙つて見つめているだけでは、待つてるのは死のみだ。これ以上何も失いたくはない。生まれ育つた場所も、見守ってくれた人も、そしてこの生まればかりの「相棒」も——ただその衝動だけで、零はメイヴを駆つた。だが解つたのは、所詮この肉体はファティマのそれしかない。人間——騎士を超えることはできないのだ、ということだつた。

その時だつた。キュルキユルキユル、とわずかな音がして、メイヴが目を開ける。抗議するような眼差しを零に向けて、エンジンがわずかに唸つた。無人のファティマシェルの中で、誰かに話し掛けたがつてゐるかのように、コンソールパネルのバックライトが数度瞬いた。

「メイヴ……怒つてるのか？」

この美しく気位の高いMHが立腹するのも無理はない、と零は思う。得体の知れない敵に傷を付けられたこと、それに加えて何よりもこの女王のようなMHに我慢のならないことがあるとすれば、その初陣にあつてこれも得体の知れない人間——見知らぬ騎士に手荒に扱われたことだろうか。装甲は激しく損傷し、機体の重量を下げるために無謀とも言える数のパートを切り離された。結果としてジャムを沈黙させることができたものの、満身創痍という形容がまさに相応しい、立つていらされるのが不思議な状態で、メイヴは初陣を勝利で飾つたのである。

「無茶をやつたおれも責められてしかるべきだ……初陣のおまえに怖い思いをさせて、悪かつた」

だが手荒に扱われたと言うなら零も似たようなものだつた。騎士用のコクピットに強引に乗り込んで来られた時、あの男に、身を沈めたシートから零を無理矢理退かせたあの腕に、逆らえなかつたのは何故だろうと思う。騎士などいなくとも戦えると思つていた。だがあの瞬間に、その矜持は打ち砕かれた。あのまま独りで戦闘を続ければ、敗北は時間の問題だつただろう。救われたのだ、おれも、メイヴも——。今回の顛末を、零はようやく冷静に認めることができるようになりつた。

「機嫌を直してくれないか……おまえのその顔も好きだよ」
冷たい装甲に顔を寄せ、詫びるように額を合わせる。かつん、という硬質な音。件の騒ぎの事後処理が慌ただしくなれる中、ヘッドクリスタルを装着したままだつたことを思い出した。これを着けると、自分の思いはどうあれ、この身はファティマという人工の生命体であることを思い知らされてしまう。ヒトに似せて造られた、ヒトではないモノ——マインドコントロールを受けていれば、こんな思い煩いとは無縁なのだろうか。

己のアイデンティティを繋ぎ止めているとも言えるそのクリスターにそつと指を這わせてみた。すると、それまで想像もしなかつた仮想が閃光のように零の脳裏を掠めた。

あの陽の色の髪をした男が、ここに触れたらどうなるのだろう。自分の中にあるファティマの本能は、果たして彼を騎士だと認め

るのだろうか。

あの時——これまでMHに乗ってきた中で、感じたこともないような他人の脈動を受け止めた時のことと思い出し、零はぞくりと背筋を震わせた。

不快なのではない。むしろ、快感に近かったそれは、今も熾火のように胸の中にくすぶつっている。もっと鮮明に思い出したくなり、零は腰掛けたメイヴの肩口から退くと、ハッチが開いたままのファティマ・シェルの中に身を滑り込ませた。

シートに身を預ける。ビビ、とヘッドクリスタルがメイヴの波長を感じ、淡く発光した。

「そうだな、おれは結局……逃げていただけなのかもしない」

ヒトとファティマの境界に立つ己の境遇を呪い、それを忘れないがためにヒトの愚かさを蔑んだ。けれど、今はそんな過去の自分を冷静に分析できる。嘘のようだった。何かを守りたいと、失うことばかりに慣れた自分が、そんな風に思えるということが。

地球上にいた頃は、こんな思いを感じたことなどなかつた。フェアリイの土を踏んだことで、自分の中で何かが変わったとでもいうのだろうか。

張り詰めていた緊張が解けたことと、メイヴの中にいるという安心感から、不意に強い疲労を覚えた零は意識を失うように浅い眠りに墜ちていった。

ブッカーは、メイヴが待機させられている格納庫へと足を運んでいた。苦しい一戦を終え、待機中のメイヴは酷い状態だつた。モーター・ヘッド・マイスターでもある彼の目にはその姿があまりに痛々しく映り、自分にも責任はあることから罪悪感に胸が痛んだ。ここ、リン・ジャクソンの元では当然のことながら万全の修理と整備は受けられず、フェアリイ基地内のファクトリーへと移送されるのを待つてている状態なのである。

一次装甲が破損し、素顔が見えるまでに損傷を受けた姿を前に、ブッカーの口から思わず許しを乞う言葉が零された。

「済まなかつたな、メイヴ。すぐに直してやるから、あと少しだけ我慢してくれよ」

「オ……シと微かなエンジンの唸る音。しかしメイヴはそれきれど沈黙してしまう。」

「こ機嫌斜め、か。どうしたら許してくれるんだ？ あれは止むを得なかつたということくらい、おまえにも解るだろう？ ああでもしなければ、おまえも……零も、無事では済まなかつたかもしぬないんだぞ」

機械相手に弁明をして何になる、と多くの者は言うだろう。しかし、メイヴの、満身創痍でありながらも優美さを失わない姿を眺めながら、その足元でブッカーは思つた。全く、この電気騎士は生き物そのものだと。まだメイヴは赤子同然だが、戦闘だけでなくその情報を食つてそれを自分のものに変容させて吸収し、育つ生き物。このMHが今後どのように育つしていくのかを知る術はない。おそらく、メイヴ自身にも解つてはいないはずだ。混乱の最中に博士から聞かされたFAFの計画、その結晶であるメイヴ。そんな生まれたばかりの最新鋭のMHが目の前で失われることには耐え難かつた。また、ジャムを目の前にして、フェアリイの軍人として叩き込まれた条件反射にも似た何かがあの時の自分を衝き動かしたのに違ひなかつた。

それに加え、マイスターとしての義務感、そして、あのファティマを助けていたいという思いが交錯し、長い間の自暴自棄な生き方の内に忘れかけていた騎士としてのブッカー自身を呼び覚ました。

そして得られた見返りは、細胞の末端までを震わせるような感情の高揚と、恐ろしいまでの破壊の快楽——騎士の狂気をも満たすそれを想起起こし、戦闘の間、耳の奥で痛いほどに響き続けた脈動を、もう一度感じたいと思った。しかしそれは同時に代償でもあった。目を背け続けた現実との対峙。ヘッドライナーという宿業。血は薄められたとはいえ、この駆は骨の髓まで、狂える兵器の末裔という血が流れているということを思い知らされたのだ。

『ジャクソン博士の言葉が脳裏に甦る。

あなたはどのヘッドライナーなら、大抵のファティマはマスターと呼ぶでしょう？』

事実、ブッカーにマスターと呼びかけたファティマは何人もいた。

しかし結局その誰も、ブッカーは傍に置きたいとは思えなかつた。
それだというのに——彼に、惹かれていることを、認めないわけにはいかないのだろうと思う。

奇妙に魅了されるものを感じながらも、騎士の本能が警告を發している。あれは、魔性だと。彼は、最高の騎士が身も世も無く望んでも、諾を与えない傲慢にして高貴なファティマ。その彼の本質を、己は理性でなく本能で察しているのだ。

それでも、否、それだからこそ、あんなにも自分には、彼が眩しく見えるのだろうか——

その時だった。MHの装甲に硬い物が当たったような小さな音が、ブッカーの耳に届いた。

見上げれば、メイヴの頭部にあるファティマ・シエルから、外へ一歩を踏み出した人影があつた。今し方の音は、彼の靴の踵が装甲に触れた音だったのだ。

「あんたがこんな所に何の用だ」

不機嫌も露わに零が言う。だがまどろみから目覚めたばかりの声は柔らかく掠れていて、あまりの言い草に腹を立てようとしたブッカーも、その気を削がれてしまつた。

「……ご挨拶だな。腕の方はもう、いいのか」

戦闘中のバックラッシュで左腕に受けた衝撃は、辛うじて骨まで届いていなかつた。わずかに痛みは残るもの、軽症で済んだのは幸運だった。零はほとんど音も立てずにメイヴの肩から地に降り立つた。まるで猫のようだ、とブッカーは思い、そしてその視線は自然と黒髪の中にきらめくクリスタルへと引き寄せられた。そういうふうに見えたのは、ファティマだったのだなど、今さらのように思い返す。しかも、天才の誉れ高いリン・ジャクソンの手がけた超級ファティマだ。今の不機嫌そなうな声も、これまで聞いたどの声も、表情も、ファティマにはあり得ないほど豊かで、もっと違う声や顔を見たいと思わせるほどだった。

「おまえ——」

「あんたに『おまえ』呼ばわりされる筋合いはない。ちょうど良い。あんたには言つておきたいことがあつたんだ」と、零。「それは奇遇だな。おれも、伝えたいことがある。先に聞こうか」

「……メイヴの初陣では世話になつた。あんたがどれだけ滅茶苦茶な騎士かよく解つた」

「何だと?」

「ペイル、ダンパー・オイル、スカート——可哀想に。メイヴはほとんど裸にされたようなもんだ。いつもあんな戯い方なのか、あんたは。えらく度胸の据わつた騎士様だと思つたよ」

ブッカーも黙つて言われているだけではない。

「おまえに合わせたサイズのコクピットとシートでコントロールしたんだぞ! とにかく軽くする必要があつたことぐらい、おまえも解るだろう。コンディションさえ良ければあんなゞさまな戦闘、誰が好んでするものか!」

「ふん。どうだろうな。ずいぶんと優雅なご身分だと聞いている。

大方酒浸りで太つたんじゃないのか。ブッカー少佐」

「……あのコクピットはそれにしたつて狭すぎる。もつと食つたらどうなんだ」

一つ溜息を吐いてから、零は返した。

「あんたは馬鹿か。おれはファティマだ。食つたところでもう成長はしない」

そしてひとしきり罵り合つたところで、二人揃つて黙り込んだ。どうにも調子が狂う……とどちらもが思つた。零は、自分が「マインドコントロールを受けたファティマ」を演じることなく話していくことに気付いた。ブッカーは、感情に任せた怒鳴つたりしたのはいつ以来のことだろうとを考えていた。

「まあ、何だ、その……」

取り繕おうとしているのが見え見えだ、と情けない気持ちを覚えつつも、ブッカーは続けた。「おれは、こんなことを言いに来たんじゃないんだ。こいつの、メイヴのことだ。おまえに言つておくべきだと思つてな」

零がかつて、フェアリイを離れ地球の騎士の元へ行くまでの間、

ジャクソン博士の元で過ごしながらメイヴのテストに加わっていたという話は聞いていた。そしてブッカーの手によってフェアリィに連れ戻された後も、彼が、まだ騎士もファティマも決まらず調整を受ける日々の続いているメイヴのために、格納庫と博士のラボの間を往復し、「彼女」に手をかけてやつていたという話を——ブッカーは、その間の彼の様子を博士がこう評したのを聞いた。「あの子はメイヴという新型機の危うさを、我が身と重ねているのよ」と。

それは、ほんの短い時間が彼とともにに戦つたことで、ブッカーにも痛いほど解った。零がのめり込むほどに、メイヴもまたそれに応えるように成長しているのだろう。「半身」——そんな言葉が、ブッカーの心に浮かんだ。

それでも、事によつては受け入れてもらわなくてはならないことだ。酷なようだが。そう思いながらブッカーは続ける。

「メイヴはゆくゆくは特殊戦……フェアリィ空軍の、おれの所属先に配備されるらしい。もちろん、今回の損傷を修理して、もう少しテストを重ねてからだが」

メイヴが実戦配備される——そう聞いた瞬間、メイヴの装甲に触れていた零の手の動きが止まつた。軀の一部をもがれるような喪失感を覚えているのか、彼の表情は硬かつた。『それに、メイヴは無人化計画を見越して造られたM.Hだと聞いた。どちらにしても、いつまでも一緒にいられないぞ』

すると、零は険しい表情を崩し、だが代わりに現れたのは自嘲めいた苦笑だった。

「おれは、メイヴと対で造られたんだ。元々は」

零の告白に、ブッカーはジャクソン博士の言葉を思い出した。本当に、そうなのだと、やはり驚かずにはいられなかつた。

「おれたちが設計されたのはFAFのM.H無人化計画よりも先だつたんだ。造つておいて、戦況が変われば宙ぶらりんのまま放り出す——勝手なものだ。けれど道具に過ぎないおれには何を言う資格もなかつたし、それきり、メイヴとは会えなかつた。ここに戻るまでは」

零は、煌めく漆黒のM.Hを見遣り呟いた。戦争なんてのは、誰かの身勝手が起こすものだ、と言いかけてブッカーは止めた。

「おれには解る。少なくとも当面、メイヴにはファティマが必要なはずだ。赤ん坊同然のメイヴにはな。それともあんたたちは、いつもを早速無人で放り出すつもりか？ 機械ならいくら壊しても直せばいいと思つていいのか。メイヴは怯えていた。あんたにはそれが解らなかつたっていいのか……！」

「おれだって、マイスターの端くれだ。生まれたばかりのメイヴに申し訳ないことをしたと思つていいさ。それこそ他のヘッドライナー以上にな……」

その時の零の様子はまさに激昂という形容が相応しかつた。感情を制御されていない彼は本当に人間と何も変わらない。声を荒げたせいでの白い頬が紅潮している。

「……メイヴに別れを言わせに来たんだろう」

ここは地球ではない。ここは常に戦場なのであり、完成している機を遊ばせておく余裕などないことは、零も理解しているのだろう。その通り、ブッカーは最初はそのつもりだつた。しかし。

「そうじゃない、おれが言いたいのはだな——」

ブッカーがそこで息を継ぐと、零はきつい眼で見返してきた。ブッカーの鼓動は知らず速くなる。そして、見惚れている場合ではないと自己に言い聞かせ、軽く一つ咳払いをして、彼は言った。

「その……おまえ、おれと、一緒に来ないか。FAFに」

零が、彼の魅入られた濃い色の眼を瞬かせた。言つてしまつた。しかしそうしたからには全て伝えるべく、ブッカーは零に口を挟む暇を与えずに続けた。

「おまえがついていてやれば、メイヴもずいぶんと安定するだろう。好い返事が返るとは端から期待していなかつた。それに、口に出してみればなんと卑怯な言葉を言つたものだと思う。咄嗟にメイヴの名を出してしまつたが、動搖している彼に付け込むようなことをしている自分が情けなくすら思えた。彼を目の届く所に置いておきたいと思つてるのは、おれの方だというのに、ど。」

そしてブッカーの思ったとおり、しばしの沈黙の後、冷たく硬質な声が呟いた。

「そしてブッカーの思ったとおり、しばしの沈黙の後、冷たく硬質

「——憐れんでいるつもりか。おれを」

硬い声で冷たく言つてのけた語尾が少し震えて聞こえたのは気のせいか。そこでブッカーは氣付いた。己は大きな誤解をしていたのかもしれない、と。

「憐れみなら要らない。おれとメイヴを助けてくれたことには感謝している。でも」

あの時に聞いた、彼の、何かを振り切るような声が、記憶の底から蘇る。

『おれは人形じゃない……』

あの叫びには、零の背負う苦悩が集約されていたのだ。ファティマでありながら、本来課せられなくてはならない残酷なプログラムから自由であるということは、想像を絶する重荷なのではないか。迷うことなく騎士を選び、その身を捧げるというファティマの幸福を彼が知ることはない。だがヘッドクリスタルを外し、人間と同じ服を纏つても、ファティマという亜人種であることは変えられない。

彼は、「普通の」ファティマを装つて生きいく以外の道はない。つたのだ。辛くなかったはずがないと、ブッカーは思う。

そして、目の前の、自分より一回りも二回りも薄い躰を抱き締めてやりたい衝動に駆られた。

「半端者のおれに同情してるのなら余計なお世話だ。あんた、聞いたんだろう、博士から。おれが、マインド——」
「止せ。そんなことは関係ない」

言葉と同時に、ブッカーは思わず零の両肩を掴んでいた。

「おまえを半端者だといえる奴なんかいやしない。おまえは凄いファティマだよ。独りで、あんな風に戦えるなんてな」

零自身の能力が大きいのは当然だが、その彼を生み出したジャクソン博士、そしてメイヴの設計に携わったトマホーク・ジョン博士の頭脳に、ブッカーは改めて畏怖を覚える。F A Fは何という人材をその手の内に收めているというのか、とも。

博士は自分を試しただけだとつたが、果たして本当にそうだったのだろうか。彼女の話の中に、彼女の本心を垣間見たような気がするのは何故なのだろうか——
「……でもおれは独りじや勝てなかつた——所詮、おれはファティ

マだ。できることなんてたかが知れてる。身の程を知ったよ」

「おまえは人形なんかじゃない。自分でそう言つたじゃないか。なあ、聞いてくれないか。これは……大事な話なんだ」

ブッカーは、零の前にふわりと膝を折つた。片膝を立てた姿で零を見上げる。その時に、掴んでいた両の肩は解放したが、零の右肩に置いていた手は、いつの間にか彼の右手を掬い上げるように包み込んでいた。

自分のものよりも一回りは小さな、ひんやりとした掌の温度。ブッカーは、時間が経つほどに不安が大きくなるのを感じていた。天位騎士が必ずしも強力なヘッドライナーたり得ない事は周知の事実。ましてやこの美しく誇り高いファティマの青年が、不様などころばかりを見せてしまった自分を選ぶ可能性などあるものだろうか、と。

だがそれでもいい、ただ伝えることができればいい。その欲求には勝てなかつた。彼を知つてまだほんのわずかな時間しか経っていないが、騎士としてある身がなすべきことを思い出させてくれたことをせめて報いたかった。彼の抱える秘密を知つても、惹かれることを止められないでいるのだから。
大きく一つ息を吐くと、ブッカーは、意を決し告げた。

「どうかおれを……選んでくれないか。パートナーとして」

真摯な声に、零の両目が見開かれる。

見上げてくる蒼い瞳の中に自分が映つていて。地球で見た空とよく似た青色だった。その中に、唖然としか形容の仕様のない己が見える。ブッカーは一時たりとも目を逸らさない。メイヴの前で、そこだけ時間が止まつたように、二人は微動だにしなかつた。

ブッカーの眼差しは、今の言葉が同情でも憐れみでもないことを物語ついていた。そしてこの眼は、恐れというものを知つてゐる眼だとも、零は直感で知つた。出撃して生きて帰れないのではないのかと、いう恐れと、大切な者を失うかもしれない恐れを知つてゐる眼。そういうれば、騎士だというのにこの男はずつと一人だつた。ファティマは、と訊こうとして、止める。もしかすると彼は、すでに一度、

かけがえのないものを無くしたことがあるのかもしれない、と思ったからだった。

零は、博士が彼やその兄弟たちに、繰り返し言っていた言葉を思い出していた。

『後悔しない相手をパートナーにしなさい』

『自分の全てを賭けても惜しくない相手を、その目で見つけなさい』

『祈る相手など知りはしない。しかし今は、運命の糸を紡ぐ見えない手に問い合わせたいと、零は思った。これが、その相手なのだろうかと。』

く、と零の口元が締んだ。

「……それじゃああんた、立場が逆だ。それはファティマが言う台詞じやないか」

右手をブッカーに預けたまま、零は空いた方の手で目元を覆つた。

「でも、あんたとおれにはそれが似合つてるかもしれないな——」

涙など出るはずもない。けれども、何故か目頭が熱くなつた。

はは、と声を立てて笑う零をして、ブッカーはしばし呆然とし、初めて見る笑顔に息を呑んだ。

「一度しか言わないからな、よく聞けよ、ブッカー少佐」

ようやく笑いを止めた零が言う。

「今からあんたが、おれのパートナーだ」

今度は、ブッカーが言葉を失う番だった。

「いいのか、本当に……」

「二度も言う気はないぞ。今さら怖気づいたのか？」

「いや……そうではなくて、だな……」

信じられない、といった面持ちでいるブッカーからようやく右手を取り返し、零は呆れたように言った。
「おれを負かした時とは別人だな。一体、どっちが本当のあんたなんだ」

あれはもう忘れる、お互いのためにもな、とブッカーはいかにも

ばつが悪そにうなじを捶いた。

「……おれはもうずいぶんの間、酷い有り様だった。ろくでもない騎士だ。おまえにも判つただろう。だから、おまえみたいな超級ファティマがなぜ、と思つたんだ」

『そんなことを言われると、あんたに負けたおれの立場がない』
おれは生まれて初めて負けたんだ、という言葉を、零は敢えて口には出さなかつた。

ブッカーは立ち上がり、零の額にそつと右手を伸ばし、髪を撫で、髪と同じ色のヘッドクリスタルに指で触れた。零は軽く目を閉じる。

黒曜石でできたようなそれが淡く光り、きらきらと、まるで歓喜するように輝いた。

流れ込んで来る、唯一人の、ジエイムズ・ブッカーという騎士のすべてが、一つ残らず刻み込まれてゆく。

「ジャムは得体の知れない強敵。地球にいるより危険なことも多いかもしれないが……どうか、おまえたちの力を貸してくれ

零は閉じていた瞼を開き、頷く。夜色の瞳が、騎士の金髪を反射して煌めいた。

「イエス、マスター……マイ・ロード」



フェアリイ空軍特殊戦総監、ジエイムズ・ブッカー少佐がファティマ「零」を連れ、前線に復帰したのはそれから間もなくのことだった。それと同時に特殊戦に正式配備された新型MH、開発ナンバー「F RX〇〇」、開発コード名「メイヴ」。ブッカーはこの生まれた間もない愛機の無事を願い、メイヴに「雪風」という名前を与えた。遙か昔、極東の国で、十三の海戦に参加し、傷つくことなく生きぬいた艦の名前だった。彼ら二人が駆ることにより、雪風は鬼神の如き戦闘性能を發揮した。

黒き不吉な影が地を走り、巨大なる電気の騎士が天地を駆けた時

代。ジャムの脅威は日々増大していた。その中で出会った彼らは、それぞれに傷つき、孤独を抱えていた。孤独は一人でも歩んでいいが、それを共に背負う誰かがいれば、もつと先まで歩いていける。彼らはそう信じた。その姿は見る者に、遙か昔からそして未来永劫交わることは無くとも、空が海を抱き、海が空を支え続けていく姿を思わずたのだという。

それは遙か、遠い未来のおとぎ話――